

## 笠利半島の位置と環境及び先史遺跡の分布

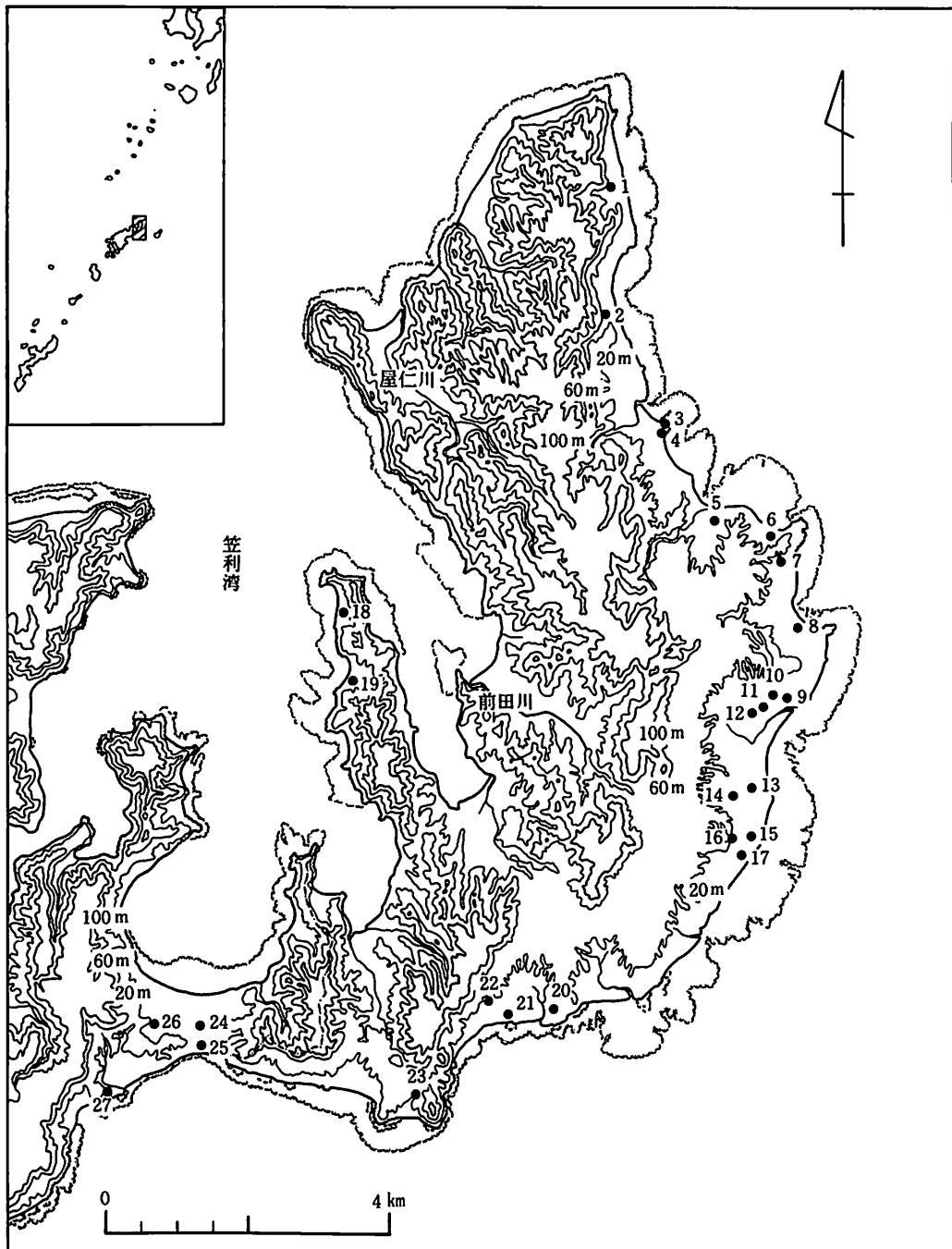
奄美大島は九州の南部から台湾にかけて弧状に通なる南西諸島のほぼ中央に位置している。笠利半島はその東北端に長く突出し、行政区画では笠利町の全域と龍郷町の東半にあたる。

奄美大島の地勢は一般に急峻である。島の南部ではかつての山地が沈降し、リアス式海岸を形成している。しかし西北部は隆起傾向を示し、特に笠利半島の東側では起伏のおだやかな台地状地形が形成されている。そのために眺望も広く、本土とは異なる亜熱帯性の植物の景観が印象深い。<sup>註1</sup>

笠利半島の太平洋岸では裾礁がよく発達し、土浜・節田・アヤマル崎付近では、比高20m前後の海蝕崖もみられる。半島の西側は小半島によって多くの支湾に分かれている。サンゴ礁は東側に較べるとやや発達が悪く、各湾の汀線付近では泥質の干潟を形成している。<sup>註2</sup>

笠利半島には他地域に比べて考古学的な調査がゆきわたっており、多数の遺跡が知られている（第1図）。半島西側のサウチ遺跡では、紡錘車・磨製石鏃・貝札や刻み目凸帯を持つ土器など、弥生文化の要素をもった遺物が出土している。<sup>註3</sup> 宇宿地区は遺跡の密集地として知られており、宇宿貝塚・高又遺跡・宇宿港遺跡など諸遺跡が存在している。宇宿貝塚は九学会による調査が行われ、宇宿下層式土器と市来式土器の共存関係が確認されたことで有名である。<sup>註4</sup> 宇宿港遺跡では、南九州の山ノ口式土器と兼久式土器が出土している。<sup>註5</sup> また、半島基部のウフタ遺跡では、面縄前庭式土器と夜臼系土器等が出土している。<sup>註6</sup>

これらの遺跡は、その殆どが小規模なもので、半島東側の砂丘上に形成されている。今回調査を行った三遺跡とも、同様に半島東側の砂丘上に位置している。笠利半島では、遺跡の形成されている砂丘は現在の海岸線を形成する新时期砂丘と、僅かに内陸よりにある洪積台地の直下若しくはその縁辺部に形成された古期砂丘とに区別される。辺留窪遺跡とコピロ遺跡はその新时期砂丘上に位置する遺跡である。これらの砂丘遺跡では、用遺跡や宇宿港遺跡のように、兼久式土器の出土が目立っている。一方、古期



第1図 笠利半島の主要遺跡分布図

- 1、用長浜遺跡 2、用遺跡 3、辺留城遺跡 4、辺留窪遺跡 5、コビロ遺跡 6、第1アヤマル遺跡 7、第2アヤマル遺跡 8、土盛遺跡 9、宇宿港遺跡 10、宇宿貝塚 11、高又遺跡 12、宇宿小学校遺跡 13、万屋遺跡 14、下山田遺跡 15、万屋泉川遺跡 16、ケジ遺跡 17、和野長浜金久遺跡 18、サウチ遺跡 19、鯨浜遺跡 20、立神遺跡 21、土浜遺跡 22、ヤーヤ遺跡 23、明神崎遺跡 24、ウフタ遺跡 25、赤尾木遺跡 26、赤尾木保育所遺跡 27、手広遺跡

砂丘及び古期砂丘に直接に重なっている新期砂丘の極く初期の部分では、高又遺跡や下山田遺跡のように、一般に面縄前庭式土器等が出土する。<sup>註7</sup> ケジ遺跡の立地条件もこれに属している。 (末本)

註1 青野壽郎・尾留川正平『日本地誌21』二宮書店 1975

註2 山口恵一郎他編集『日本図誌大系 九州II』朝倉書店 1978

註3 笠利町教育委員会『サウチ遺跡』 1978

註4 九学会連合奄美大島共同委員会『奄美—自然と文化』論文編 1959

註5 熊本大学文学部考古学研究室『宇宿港遺跡』1981

註6 熊本大学文学部考古学研究室『ウフタ遺跡』1982

註7 中山清美「奄美大島の先史遺跡」『南島史学』第17・18号 1981

# ケ ジ 遺 跡

## 一、位置・現状・調査

ケジ遺跡は、笠利半島東岸、大島郡笠利町大字万屋字ケジ2227番地に位置する。

中山清美の発見にかかり、面縄前庭式、松山式土器の破片が採集されている。この両形式の土器は編年上若干の問題があるので、当遺跡の調査が期待されていたのであるが、昨年 of 砂採り工事のため、その西側の大部分と南北両端が削り取られ、方形の小区画を残すのみとなった（第2図）。やむなく、せめてその残骸の様態を観察すべく、今回の調査に及んだ。

遺跡は海岸から300m程の内陸部にあり、東に伸びた舌状の洪積台地の末端部に形成された古期砂丘上にある。標高20~40mの西側の台地から数本の小川が小さな谷を形成しながら海に注いでいるが、そのうちの一つが遺跡のすぐ近くで流路を北に変え、新期砂丘と古期砂丘の間にある湿地帯を通り、海に注いでいる。この湿地帯は小川に沿って遺跡の南側まで進入しており、その一部は客土され、畑として利用されている。

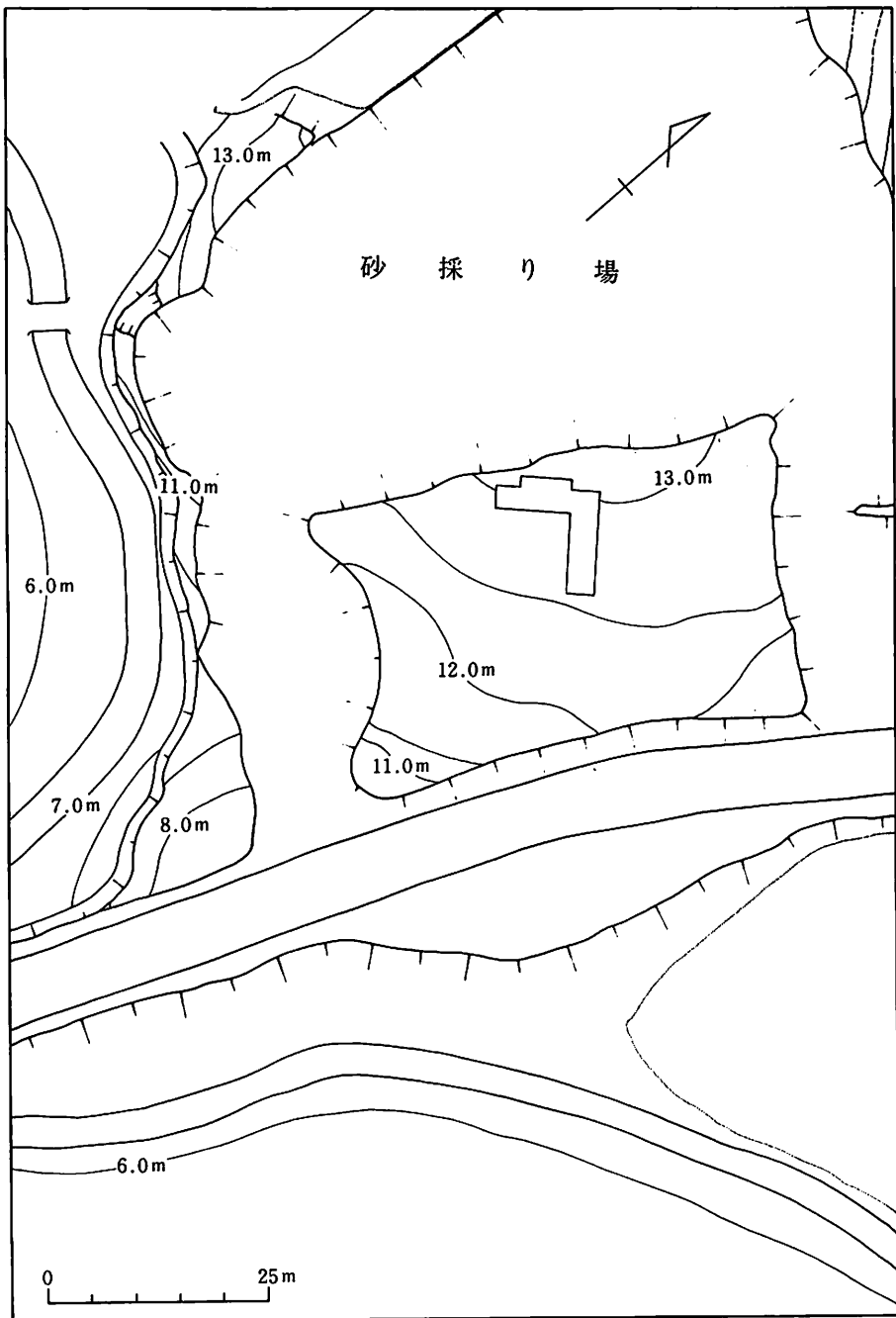
調査は1982年7月16日より7月22日まで行われた。まず中山が資料を採取した地点に近づけて5m×2mのトレンチを南北に掘り（第一トレンチ）、さらにその北側に5m×2mのトレンチを延長し（第2トレンチ）、遺構を確認するため第1、第2トレンチの西側に5m×1mでトレンチを拡張した。次いで第2トレンチから東方に方向を変え、8m×2m延長した（第3トレンチ）（第2図）。（池田）

## 二、層序と遺構

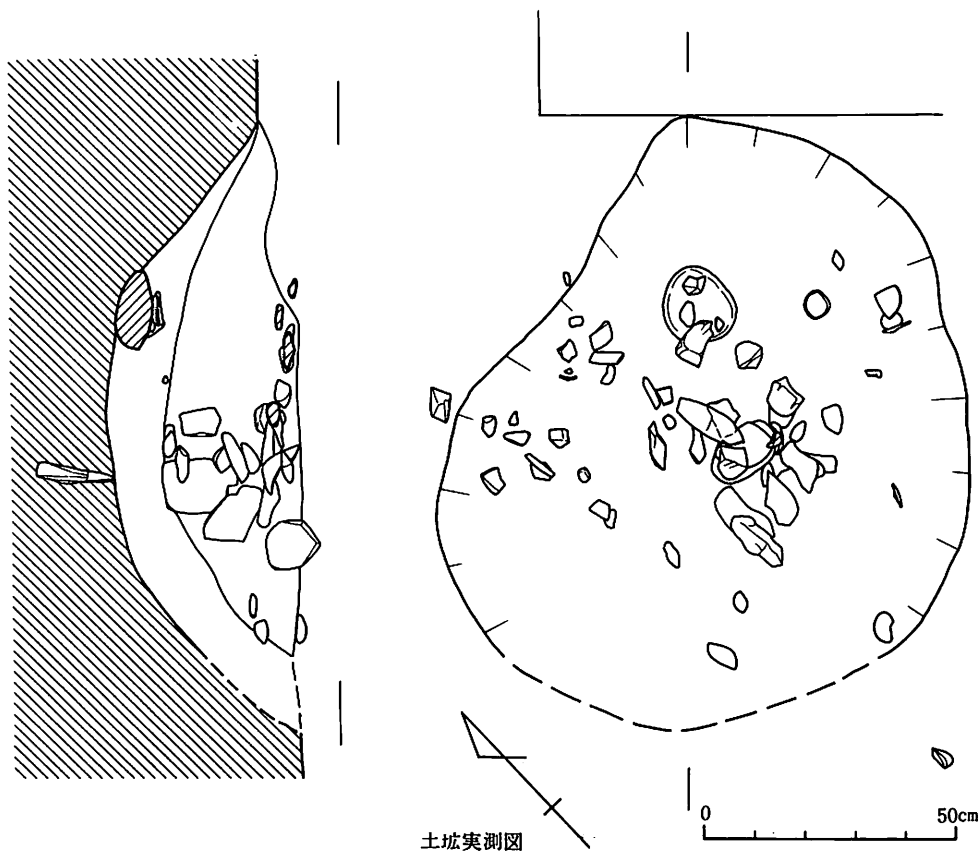
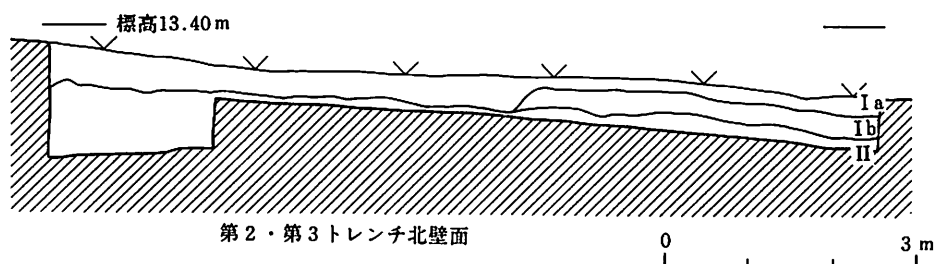
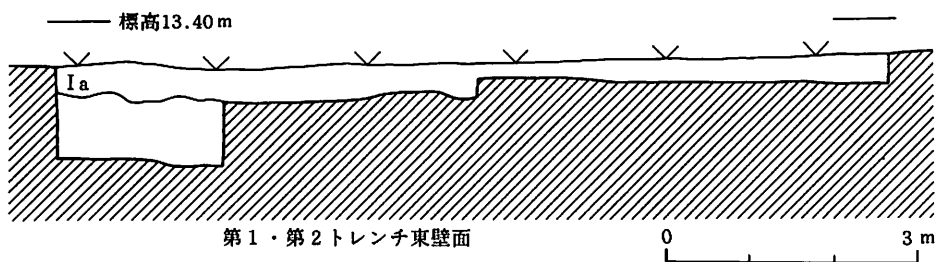
層序は生活による汚染の認められるI層と、そうでないII層に大別され、前者は更にI層a・I層bに二分される（第3図）。

I層a 厚さ約10~20cmの灰色を呈し、攪乱を受けた腐植砂層（表土）である。

I層b 第3トレンチの北側に見られる厚さ約20~30cmの砂層で、黒褐色を呈している。粘性はない。



第2図 ケジ遺跡地形測量図



第3図 ケジ遺跡土層断面・土坑実測図

II層 最下層にあたる白色砂層である。出土遺物はなかった。第1トレンチにおいて2×2mの範囲で深さ2.5mまで掘り下げ、白色砂層の続くこと、無遺物層であることを確認した。

第II・IIIトレンチにまたがり、II層最上部から掘りこまれた直径約1m、深さ約50cmの土壇が検出された。基本層序とは別に、壇の内部で黒褐色の下層と黒色の上層の2つの覆土層が確認された。上層から土器片（I・II類）・石斧・砥石らしきもの・魚骨・貝類が検出された。上層最下部からは、土器片（I・II・IV類）が検出されたほか、焼けた形跡のある角礫数点と木炭粒が検出された。床面直上（下層）からも、土器片（I・II・IV類）、角礫等が検出された。なお、土壇内に焼土は見あたらなかった。（第3図；図版2下）

（坂口）

### 三、出土遺物

#### 〈土器〉（第4図；図版3上）

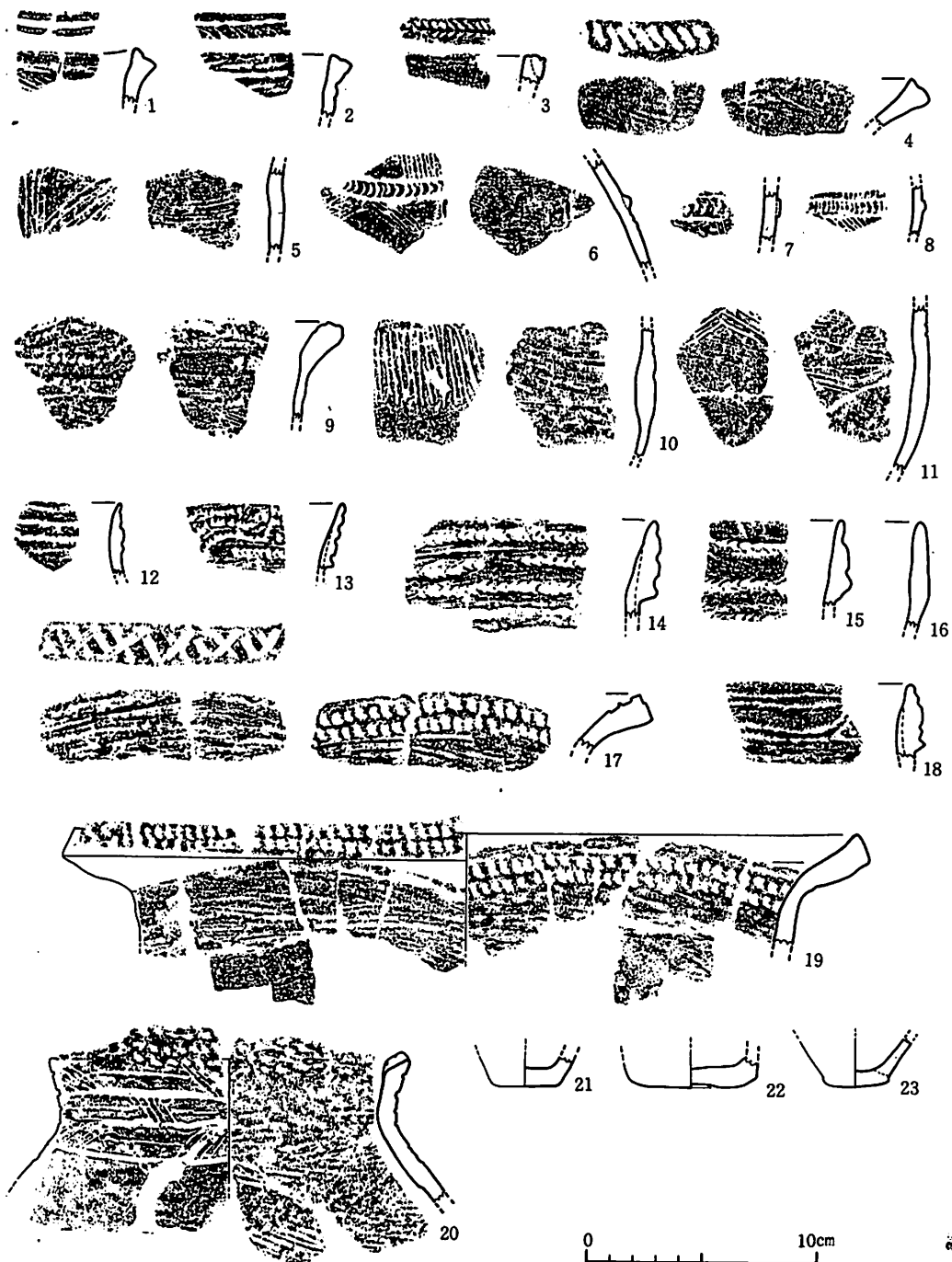
土器は、表採品<sup>註1</sup>のほかはすべて土壇中より出土した。表採品に厚手のものが多く、土壇中ものは薄手であった。土器の器形は、ほとんど深鉢形であると思われ、その文様と器形の相異によりI～V類に大別できる。

I類（1～4・9・17・19・20） 口唇部に文様を施したもので、口縁部は肥厚・外反し、器面全体には条痕がある。口唇部の文様は、刺突文（3・9・19・20）・押し引き文（2）・沈線文（4・17）・凹線文（1）など多様である。また、口縁部外側に刺突文（9）・押し引き文（2）・沈線文（20）を施しているもの、内器面に刺突文（17・19）を施しているものがある。焼成はすべて良好であるが、胎土はややあらい。

II類（5～8・11） 胴部に数条で組をなす沈線文があるもので、6・7・8は刺突文のある貼付凸帯を有している。胎土には石英を含み、焼成は良好、色調は黒褐色である。

III類（12～15・18） 肥厚・外反した口縁部に押し引き文を施したものである。押し引き文が曲線的なもの（13・18）と直線的なものがある。調整はナデである。胎土に雲母を含むものがあり、焼成は良好、色調は黒褐色のものが多い。

IV類（16） 口縁部が肥厚した無文の土器である。無文である点を除けば、器形は



第4図 ケジ遺跡土出土器実測図

土抔内：1・3・5・8・11・21・22 表採：4・9・10・12・15・17・20・23



Ⅲ類に類似する。

V類(10) 胴部上半に縦方向の沈線文を施したもので、内側には条痕がある。

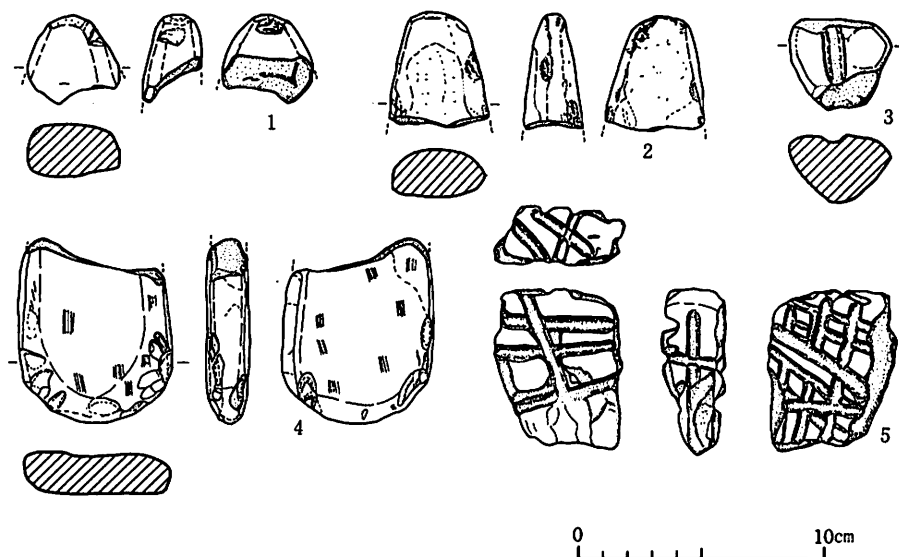
その他、底部(21・22・23)が発見されたが、いずれも平底である。

なお、I類は松山式、II類は面縄前庭式、Ⅲ類は面縄東洞式に相当すると思われる。  
土坑中からは、I類・II類・IV類が出土し、Ⅲ類・V類は表採品のみであった。

註1：表採品には、以前中山清美が採集し、『南島史学』17・18号(1981.1)及び『笠利町郷土館報』創刊号(1981 笠利町教育委員会)で発表したもの(第4図 4・9・10・17・19・20)を含む。

### 〈石器〉(第5図; 図版3下)

石器は石斧3を含め、計5点を出土した。石斧はいずれも磨製で、研磨は全面にわたっている。1・2は頭部の残欠である。1は、主面と側面との間に稜があり、断面は隅丸長方形である。2は泥岩製で、断面はカマボコ形である。4は刃部の残欠の可



第5図 ケジ遺跡出土石器実測図

土坑内：2・3 表採；1・4・5

能性が強い。片刃である。断面は扁平で、中央部が特に擦り減ってくぼんでいる。刃先には使用痕が多数みられ、磨耗が激しい。粘板岩製である。5は平坦面全てに多数の溝が交錯している。何らかの研磨に使われたと思われる。3は中央部に一条の溝があるもので、性格は5と同じと思われる。3・5とも砂岩製である。 (馬原)

〈自然遺物〉

土坑内より貝・魚骨片が出土したが、魚骨片は小片少量であった。貝は21科26種に及び、以下のとおりである。

腹足綱		
ニシキウズ科	オキナワイシダタミ	<i>Monodonta labio</i>
	サラサバテイ	<i>Tectus maximus</i>
	ベニシリダカ	<i>Tectus conus</i>
タカラガイ科	ハナヒラタカラ	<i>Monetaria annulus</i>
アツキガイ科	アツキガイ	<i>Murex troscheli</i>
カタベタマシ科	カタベタマシ	<i>Modulus tectum</i>
オニノツノガイ科	オニノツノガイ	<i>Cerithium nodulosum</i>
アマオブネ科	アマオブネ	<i>Theliostyla albicilla</i>
ツタノハガイ科	オオベッコウガサ	<i>Cellana testudinaria</i>
リュウキュウマスオ科	リュウキュウマスオ	<i>Asaphis dichotoma</i>
ヤツシロガイ科	レンジャクガイ	<i>Casmaria cernica</i>
オニコブシ科	コオニコブシ	<i>Vasum turbinellus</i>
カラマツガイ科	コウダカカラマツ	<i>Siphonaria lanciniosa</i>
ウミニナ科	ウミニナ	<i>Batillaria multiformis</i>
リュウテン科	ヤコウガイ	<i>Lunatia marmorata</i>
	チョウセンサザエ	<i>Marmarostoma argyrostomum</i>
ソデガイ科	マガキガイ	<i>Conomurex luchuanus</i>
イモガイ科	不明	
マイマイ科	不明	
斧足綱		
イタボガキ科	マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>
シャコガイ科	シラナミ	<i>Tridacna elonagata</i>
	不明	
ヌノメアカガイ科	ヌノメアカガイ	<i>Cucullaea labiata granulosa</i>
マルスグレガイ科	スグレモシオガイ	<i>Crassatellites nanus</i>
	アラスジケマンガイ	<i>Gafrarium tumidum</i>
	ホソスジイナミガイ	<i>Gafrarium pectinatum</i>

これらの貝のうち、最も多かったのはアマオブネで、ウミニナ、マイマイがこれに次ぎ、他は少量であった。

## 四、まとめ

ケジ遺跡は破壊のひどい遺跡である。辛うじて残った包含層も既に攪乱を受けており、遺構としては小さな土壇唯ひとつが検出されただけであった。これに似た壇の発見例は近年数を増し、大池遺跡<sup>註1</sup>、貝志川島遺跡群の岩立遺跡<sup>註2</sup>、それにウフタ遺跡<sup>註3</sup>などで報告されている。類例を一つふやすことができたわけである。土器についてはI類（松山式）とII類（面縄前庭式）の共伴が確認された点に意義がある。

なお、当遺跡の破壊跡の露出断面より推察すると、この遺跡はもともと極めて規模の小さなもの——ひろがりにして20mを出ない範囲のもの——であったことが確実である。砂採り工事中再々現場をおとづれた中山が、崩土の中に微量の土器片を見かけたにとどまることもこれを傍証している。笠利半島東岸にはこのような小規模遺跡の点在することが知られているので、それらを併せ観察して本遺跡の理解の手がかりを得たく、隣接地を精査して若干の知見を得た。以下の「付説」がそれである。（西谷）

### 付説 砂丘性小遺跡について

ケジ遺跡は砂丘上に形成された小遺跡である。類似の小遺跡が南島一般に存在することは以前から知られており、その性格をめぐる提言もあつた<sup>註1</sup>。今回ケジ遺跡の調査に際してその理解を深めるべく、隣接する地域を探查し、僅か1000m×450mの範囲に15遺跡を指摘することができた（第6図）。以下、地図の番号を追って略述する。

①中永田A遺跡 海岸より450m、標高9.1m。西から伸びた台地の舌の裾に堆積した砂地に占地。現在蔬菜が栽培されており、土地の断面の観察によれば耕作による攪乱部20cm、続いて発色のよい黄褐色砂層70cmがあり、その下の褐色砂層20cmが遺物の包含層で、その下はいわゆる地山である。少量の土器片が散在するも、細片のため形式不明。断口は鋭く、ローリングの痕をとどめていないので、二次堆積の可能性は少ない。広がり30×30mほどと思われる。

②中永田B遺跡 ①より30mほど海寄りにあり、高さは僅かに高く、9.3m。甘蔗を栽培してあり、土地の断面で見ると、耕作層と黄褐色砂層計80cmに続いて30cmの褐色砂層があり、遺物が含まれている。土器片は少量で、形式も不明であるがローリング

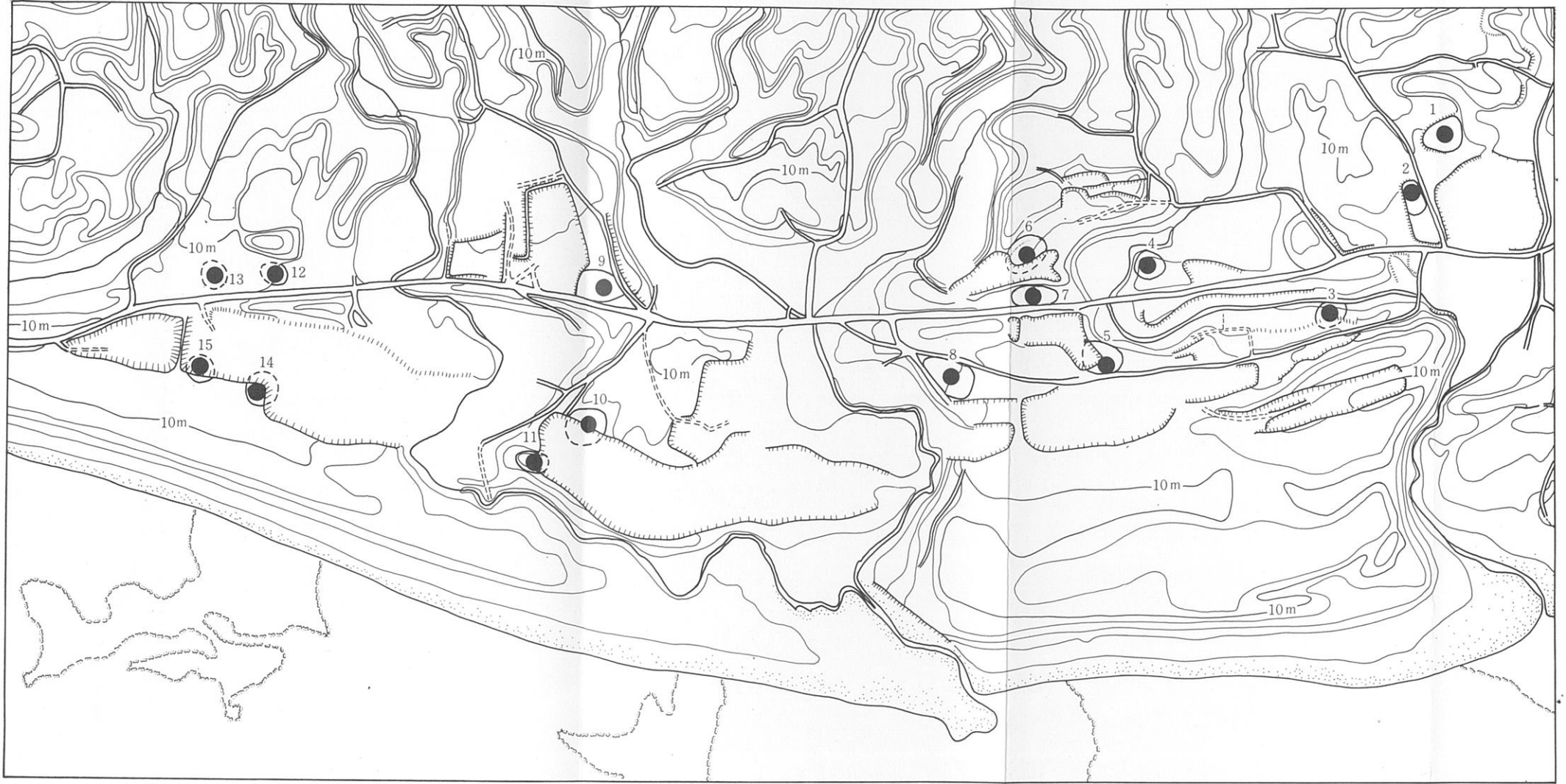
の痕はない。土器片と共に二枚貝の殻が散見される。ひろがりは東西40m、南北10mほど。褐色砂層の下は白砂層で遺物はなく、深さは65cmまでしか計れないが、随分深そうである。舌状の台地の裾を更に離れたためであろう。

③前田A遺跡 空港道路は古期砂丘の肩のあたりをかすめながら走っているの、その東側は小さな崖をなして新期砂丘の後背湿地に落ち込んでいることが多い。遺跡はその崖下に入り、前川の支流の西縁に沿って占地しており、その広がり10m×10mほどである。海より330m、標高7m、甘蔗畑。土地の断面は耕作層と褐色砂層合わせて60cm、続いて黒褐色に汚染された遺跡の層が30cm。その下の無遺物層は100cmほどで湧水に沈んでおり、以下不明。土器片は僅少であるがローリングを受けておらず、胎土、焼成など兼久式に類似している。マガキガイの散在が目される。

④中永田C遺跡 空港道跡の西側、海より360m、標高11m。洪積台地の舌がこの付近だけ北から南の方向に曲がっているが、その舌の上の砂地の東側に占地する。蘇鉄の抜き取り作業で発見されたもので、層序は60cmの攪乱層の下が20cmの遺物包含砂層で、褐色を呈する。その下は地山、即ち洪積台地である。遺跡の大きさは南北長20m、東西幅10mにすぎない。薄手の土器片が採集される。形式不詳であるがいわゆる面縄前庭式である可能性が強い。ツイジ貝・ラクダ貝等の大形の巻貝が伴出するが、いずれも胴のあたりを破壊されている。

⑤前田B遺跡 海より280m、標高10mの地点。道路の東側である。汀線に沿って隆起した砂丘はその後背湿地を隔てて再び盛り上がりながら古期砂丘の裾にかぶさっているが、この付近は特にその傾向が強く、遺跡はこの再堆積した新期砂丘の丘頂付近に形成されている。砂採りの崖面で見ると明褐色の砂層70cmに続いて20cmほどの遺物包含層があり、強く汚染されて暗褐色を呈する。以下無遺物層が2mほど露出している。大半が削り去られているが南北40m、東西30mほどに広がっていたものと思われる。汚染の強さにかかわらず遺物は多くない。ローリングを受けていない兼久式の土器片と、ヤコウガイ・スイジガイの破片が散見される。

⑥下山田遺跡第1地点 既に紹介されている遺跡である。<sup>註2</sup> 空港道路の西側で、海岸より390m、標高12m。洪積台地間の小さな谷を埋めた砂丘の上に形成されたものであるが、現在そのほとんどを削り去られ、地籍の堺に当る部分が帯状に残されている



第6図 笠利半島東部（ケジ遺跡周辺）小遺跡分布図

に過ぎない。範囲は南北40m、東西30mほどであったろう。30cmの攪乱層の下に50～60cmの暗褐色の汚染層があるが、その一部が3mにわたって落ち込み状に厚さを増し、最深部で厚さ1mに達する。遺物は主としてこの部分にあり、比較的下層から曾畑式、比較的上層からいわゆる面縄前庭式の土器片が採集されている。但、前者は極めて少数であり、後者がこの遺跡の主流であるらしい。オオツタノハの貝輪、ホシダカラの貝ヒ、ヤコウガイの蓋の貝弁、すり石、チャートの剝片、拳大のチャート塊をはじめとする多数の持ち込み礫など、比較的多くの遺物が採集されているが、その殆どは後者に属するものであろう。食滓としては大形の巻貝の破片が多く、スイジガイ・マガキガイが目立っていた。なお、包含層の下の白砂無遺物層は2mまで露出しているが、基盤層には達していない。

⑦下山田遺跡第2地点 第1地点の東40mのあたり、空港道路に接して道路側から砂丘が蚕食された部分があり、遺物が散乱している。標高9m。遺物の包含層は表層のすぐ下であるらしい。南北の長さは60mにわたるようであるが、東西の幅は10mほどに過ぎない。道路によって削られたものか。土器片は宇宿下層式に包括されるものであるが、面縄前庭式と識別できるものが数点ある。チャートの剝片、大形の螺の破片が散っているが、スイジガイ、マガキガイが目立つ。

⑧泉川遺跡第3地点 道路の東側、海より300m、標高8m、新时期砂丘の西側の膨隆部に立地する。目下砂採り作業で掻き散らしてあり、層序等の観察は困難である。宇宿上層式に含まれる土器片、貝殻片が30×40cmにわたり少量ながら散乱している。

⑨ケジ遺跡 記述省略。

⑩泉川遺跡第1地点・⑪泉川遺跡第2地点 ケジ遺跡の南150mのあたりに幅70mほどの谷があり、泉川が東流している。泉川は道路下の低地を蛇行しながら海浜の砂丘に当たって北に方向をかえる。泉川遺跡はそのあたりにあり、ケジ遺跡から東に130m（第1地点）と160m（第2地点）ほどはなれている。低地の中でもこのあたりは特に高く、標高は8mほどである。両者ともほぼ完全に破壊されているが、前者は35×30m、後者は35×10mほどの広がりがあったものようである。今僅かに兼久タイプの土器片とヤコウガイ・マガキガイの殻を散見するにとどまる。

⑫和野字長浜A地点 空港道路の西側、海より225m、標高9m、新时期砂丘の西縁

の隆起部にある。砂採り跡で見ると、30cmの耕土の下が40cmの灰褐色の遺物包含砂層で、以下は深度不明の白砂層である。30×20mほどの広がりがあったものようであるが、その三分の二は既に削り去られている。土器片の量は他の小遺跡に比してやや多く、宇宿下層式に含まれるものである。ただし、同式の中でも古式とされるものはないようである。採砂作業中リュウテン科の小形の螺が貝溜りになって出土した。現在、マガキ貝、スイジガイの破片が散っている。この遺跡の西に続いて南北60m、東西25m、比高5mほどの小丘がある。陶磁器片、サンゴ礁のブロックなどが散乱しており、近世の埋葬地であるらしい。ついでに記録しておく。

⑬和野字長浜B地点 ⑫の数十メートル南、海より200m、標高8m。完全に破壊されている。ひろがり、層序、出土土器片等⑫に同じ。工事中マルスタレ貝科の二枚貝が貝溜りをなして出土している。

⑭長浜金久遺跡第1地点 空港道路を南下するにつれて洪積台地と海浜との距離が狭くなる。この遺跡は空港道路から数十メートル東に寄った地点にあるが、海浜からは120m、標高は11mである。砂採り前の地形で言えば、海浜の砂丘を海側に少し降った地点に当る。20×10mほどのひろがりであった模様。40cmの攪乱層の下20～30cmの褐色砂層が包含層である。小遺跡ながら拾得されている土器片は多く、全て兼久タイプのものである。但し、例えば繰り返し踏まれたものようで、細片に碎かれている。食滓としては大形の巻き貝が多く、ヤコウガイ・スイジガイが目立っている。なおマガキガイの貝溜りが二層にわたって残存している。

⑮長浜金久遺跡第2地点 ⑭の50mほど南にある。層序、ひろがり等⑭と略同様である。土器も兼久タイプのものであるが量は少ない。マルスタレガイ科の二枚貝の貝溜りが残存し、層の断面にマガキガイが多量に露出している。

以上、極く狭小な地域の中で、類似性の強い遺跡を15も指摘したわけであるが、茂みに妨げられた地点も多く、今後の開発の進展にあわせて観察を続けてゆけば、なお数遺跡を記録することができるであろう。

これらの遺跡は、a)極めて規模の小さい遺跡で、b)砂丘上に形成されているという点で強い共通性を持っている。また、c)非常にその数が多いことも特徴に加えてよいであろう。そして此の地域で通観する限りでは、d)比較的古い遺物を出土する遺跡は

洪積台地の縁辺部か若しくはそれに近接した地点にあり、㊸新期砂丘に形成されているのは、宇宿上層式～兼久タイプの土器の時代に属し、①海浜の堤防状の砂丘の上に占地するのは兼久タイプに限られるものようである。

㊴に当るのは㊶㊷の下山田遺跡第1及び第2地点・㊹ケジ遺跡・㊴中永田C遺跡・㊲和野字長浜A地点・㊳和野字長浜B地点などであり、全て空港道路の西側にある。㊸に当るのは㊸前田A遺跡・㊹前田B遺跡・㊺泉川遺跡第3地点などである。この付近は砂採り工事の特に激甚な場所であるので多少曖昧な点もあるが大勢は動くまい。①に当るのは㊴長浜金久遺跡の第1地点及び㊵第2地点が典型的だが、㊴泉川遺跡第1及び㊵第2地点もそれに類するものだ。此のような占地の仕方は、これらの小遺跡がもともとは泉川遺跡のように当時の汀線に近く形成されたことを示すかに見える。若しそうであれば、任意の地点の砂丘のおおよその形成年代を推定できることになる。

次に、各遺跡とも生活汚染層を形成しているのであるから、小人数による一定期間の居住が行われたに相違ない。しかし、長浜金久第1地点を除いて土器にローリングの痕がないのは、その居住の期間の短かったことを示している。その期間は、大半の地点からマガキガイが出土している<sup>註3</sup>ので、冬期であった可能性が強い。また各遺跡ともその地点の稜線より東側に営まれているのは、太平洋に身をさらす危険よりも西側により大きな困難があったことを示している。筆者はこれに西北季節風をあてている。此の風は云うまでもなく冬のものである。

実は最近まで、笠利半島西岸の村々で特に漁獲に依存することの多かった家族は、冬期に東岸の縁者をたよって移動することが多かった。そのための舟越しがウフタ遺跡<sup>註4</sup>のある赤尾木のあの地峡であったのだ。

往時、東岸には宇宿を中心とする好地点があって、高又・ケジ・ヤーヤ等、爪形文・曾畑式以来の人文が展開され、やがて西に向かって分村した。サウチ・クジラハマ・ヤニ等、発見された西の遺跡は全て新しい。人々は冬に本村をたよってその付近に舟筏を廻航し、一種の季節移動をすることが多かった。その跡が、東岸に密集する小遺跡の少なくともその一部であったと考えてみたい。

南島に点在する小遺跡については、仮泊性漁業基地とする考えが示されている<sup>註1</sup>。一般論として充分に首肯できる意見である。しかし、笠利半島東岸の小遺跡はあまりに



も数が多く、必ずしも組織的な漁撈活動に便宜な地点にあるとは限らないし、しかもその形成は冬期に集中しているらしい。そこで、言わば筆者単独の仮説として述べてみた。

しかし慧眼な読者は半島の西岸に遺跡が出現する以前の遺物を出す小遺跡の存在が分村論と齟齬してしまうことに気づかれたに違いない。いずれ東岸全域について資料を集めてみなければならぬし、その過程の中で、この撞着を包摂することのできるような、更に一步すすんだ仮説に拡大したいと考えている。 (中山)

註1 白木原和美「奄美先史学の当面する諸問題」『琉大史学』No.6 1974

註2 中山清美「先史時代における奄美と沖縄」『笠利町郷土館報』No.1 笠利町教委・笠利町郷土館 1981

中山清美「奄美大島の先史遺跡」『南島史学』No.17・18 1981

註3 夏のマガギガイは極端に身が細いので、このあたりの海を知る者は、夏は捨ててかえり見ない。冬は身が充実し、美味であるので好んで捕食される。

註4 熊本大学文学部考古学研究室「ウフタ遺跡」1982

# コピロ遺跡

## 一、位置・現状・調査

本遺跡は、大島郡笠利町須野の通称コピロの海浜砂丘上にある。(第7図)

笠利半島東部は、奄美大島全般の地形と異なり、緩かな丘陵状の台地となって太平洋に面している。海岸沿いには海蝕によるものと思われる小規模な段丘がある。アヤマル崎から須野の集落にかけて海岸は北向きであるが、この間に岬状に突出したいくつかの岩盤の露頭が見られる。本遺跡の立地する砂丘は、その中の二つの露頭間に二過程を経て堆積したもので、砂丘中央部には、堆積の新旧を明確に区分する窪地が東西に細長く形成されている。遺跡は北側の新期砂丘上にある。遺跡の南約100mの崖下に湧水点があるが、水量は乏しく、流れは作らない。また東西の末端には、露頭に沿って涸川が形成されている。砂丘全体の標高は7m程度である。

コピロ遺跡は、砂採り工事によって人骨が出土したために発見された遺跡である。発見された人骨は、砂採り工事によってできた切通し断面に露出していた。また、人骨が露出した同じ層準で板状のビーチロック数個が確認され、さらにその下の層から兼久式土器片が検出された。

発掘調査ではビーチロックが露出している地点から人骨の露出地点にかけ、長さ4m幅1mのトレンチを入れ、他の人骨の発見に伴って順次トレンチ全体を拡張し、4基の土塚墓と箱形の石棺1基、兼久式土器を伴う生活の跡等を確認することができた。

現在この付近は、開墾および砂採り工事によって地形の変貌がひどく、遺跡の西側がかろうじて旧地形を留めているにすぎないが、東側に1ヶ所、島状に旧地形を留めた部分がある。いわゆるノロ墓があるため破壊を遠慮されたものである(第7図)。

調査はケジ遺跡、辺留窪遺跡と平行し、7月16日～25日の間に実施された。(蒲原)

## 二、層序 (第8図; 図版5)

層位は第I層から第VI層まで確認された。白色砂層と淡暗褐色砂層が交互に堆積し、南側に向かってわずかに傾斜している。



第7図 コビロ遺跡地形測量図

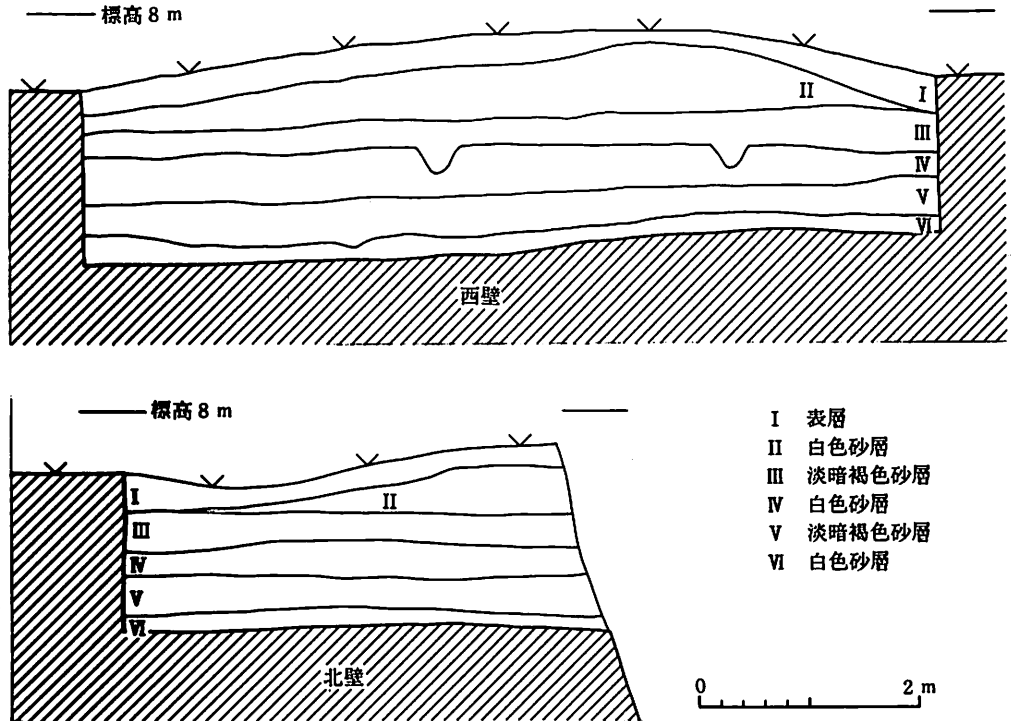
I層 厚さ約10~30cmの表層である。

II層 白色砂層で、山なりに堆積し、最も厚い部分が約60cmである。出土遺物として染付陶磁片が数点見られる。石棺墓、及び土壙墓は、この層の最下面から掘り込まれたと推定される。

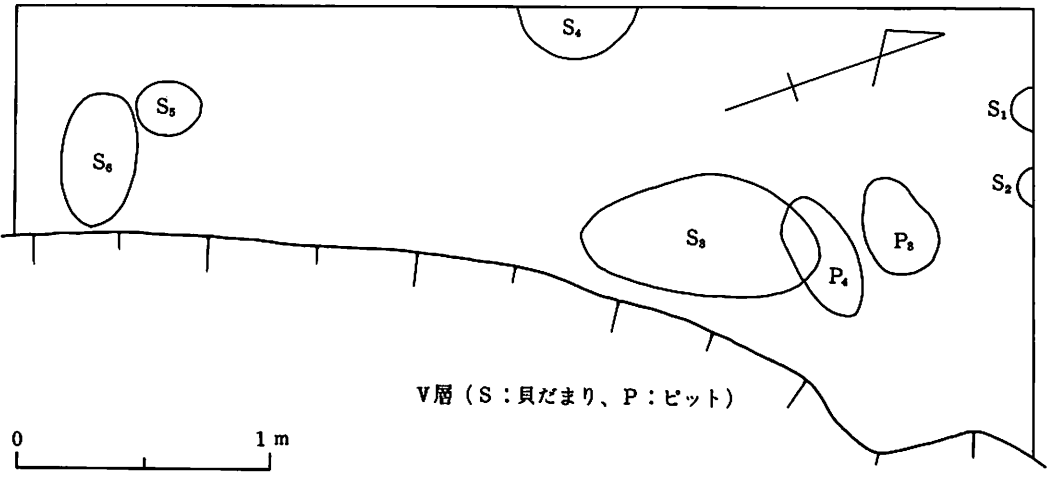
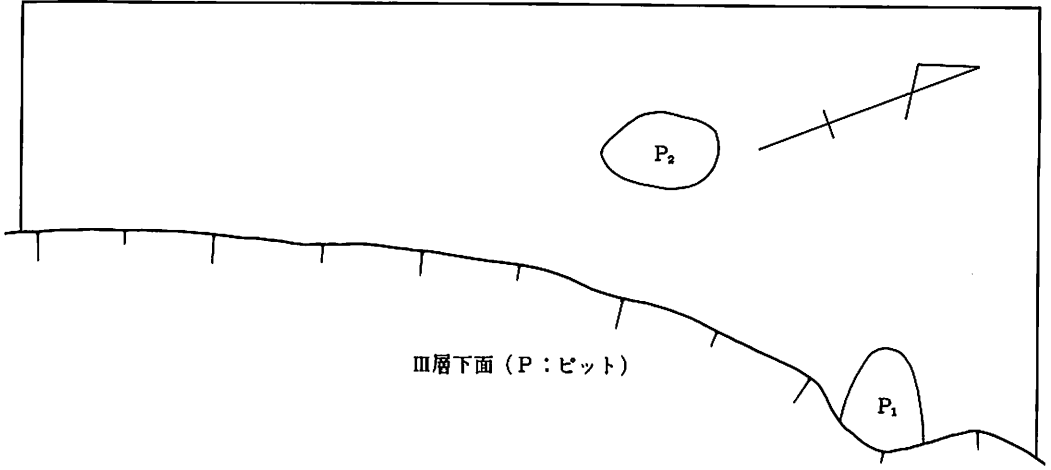
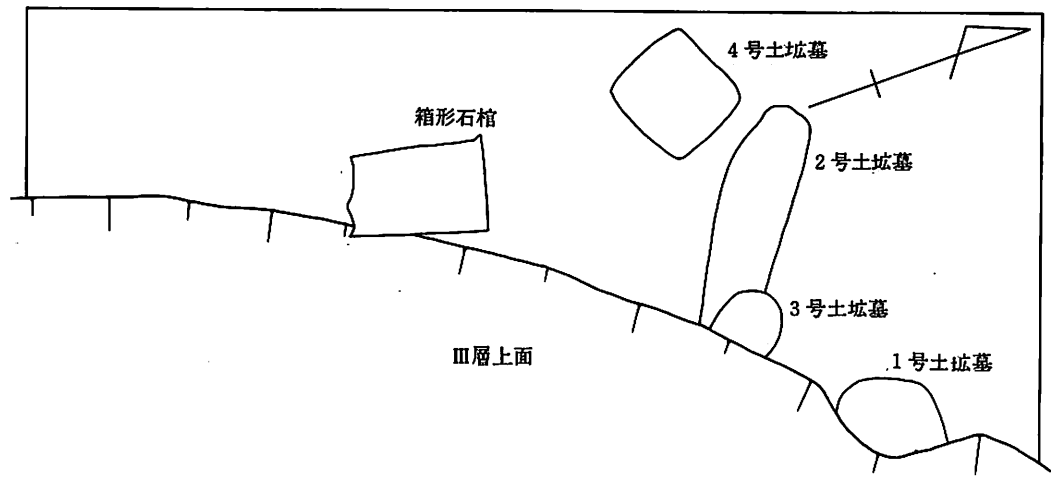
III層 淡暗褐色砂層で、厚さは約25~40cm。最下面からIV層にかけてピットが数箇所に掘り込まれ、ピットの中には、礫やサンゴ片、貝殻が焼けた状態で混在していた。只、多量の貝殻が検出された。

IV層 白色砂層で、厚さは約20~40cmである。出土遺物としては、獣骨片が一片検出された。

V層 淡暗褐色砂層で、厚さは約25~40cm。最下面からVI層へ掘り込んだピットや貝溜りが随所に見られる。土器片や貝殻、獣骨などが多数検出され、出土遺物の大半がこの層に集中している。土器片は、グリッドの各所に比較的固まった状態で検出された。



第 8 図 コピロ遺跡、土層断面図



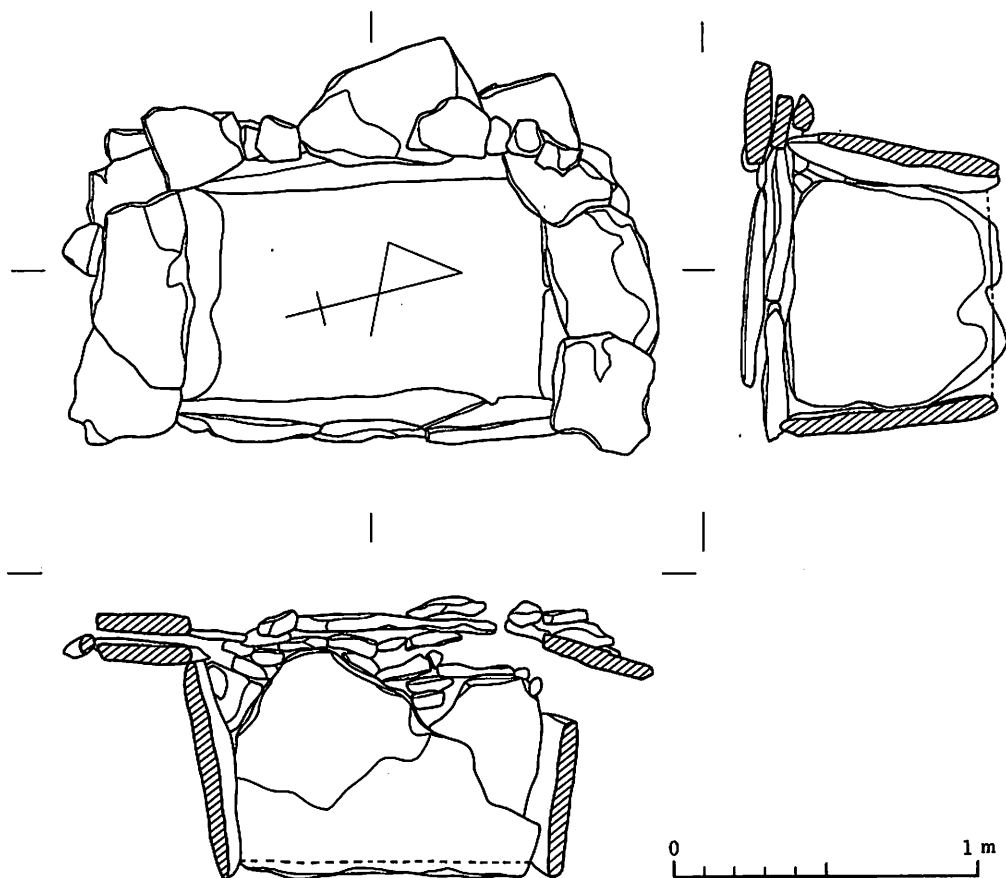
第9図 コピロ遺跡遺構配置図

VI層 白色砂層である。この層からもV層出土の土器片と同形式の土器片が数点出土した。ただし最上面に限られているので、V層から沈澱したものであり、VI層は本来、無遺物層であると推定された。 (古賀)

### 三、遺 構 (第9~12図; 図版6~9上)

遺構は第III層より箱形の石棺1基、土塚墓4基が検出された。また第V層ではピット4ヶが検出された。

(1) 箱形石棺 石棺は、厚さ5cm~20cm程度の板状のビーチロックを長方形に組み合わせたもので、内法はおよそ70×100cm、深さ(側壁の高さ)80cmである。側壁



第10図 コピロ遺跡、箱形石棺実測図

は大きな一枚岩でつくられているが、その合せ目の上部には粘土で目張りした痕が残されていた。なお床には石は敷かれていなかった。石棺内には不規則な形をした板状のビーチロックが重なり合っていたが、蓋石が割れて落ち込んだものであろう。その下から人骨が検出されたが、他の塚の人骨と異なり、辛うじてそれと判る程度の細片であった。埋められたのではなく、棺の中で直接空気に曝されていたためであろう。なお民俗例から推して再葬である可能性が高い。(内山)

(2) 土塚墓 土塚墓はいずれも、暗褐色をなすⅢ層の最上面で墓塚を検出したが、墓塚内の砂はむしろⅢ層のそれより明るい色調を呈しており、Ⅲ層堆積終了後ある程度の時間が経過して墓塚を掘り込んだことが看取される。従って層序的には、Ⅲ層から掘り込まれた箱形石棺より新しいことになる。

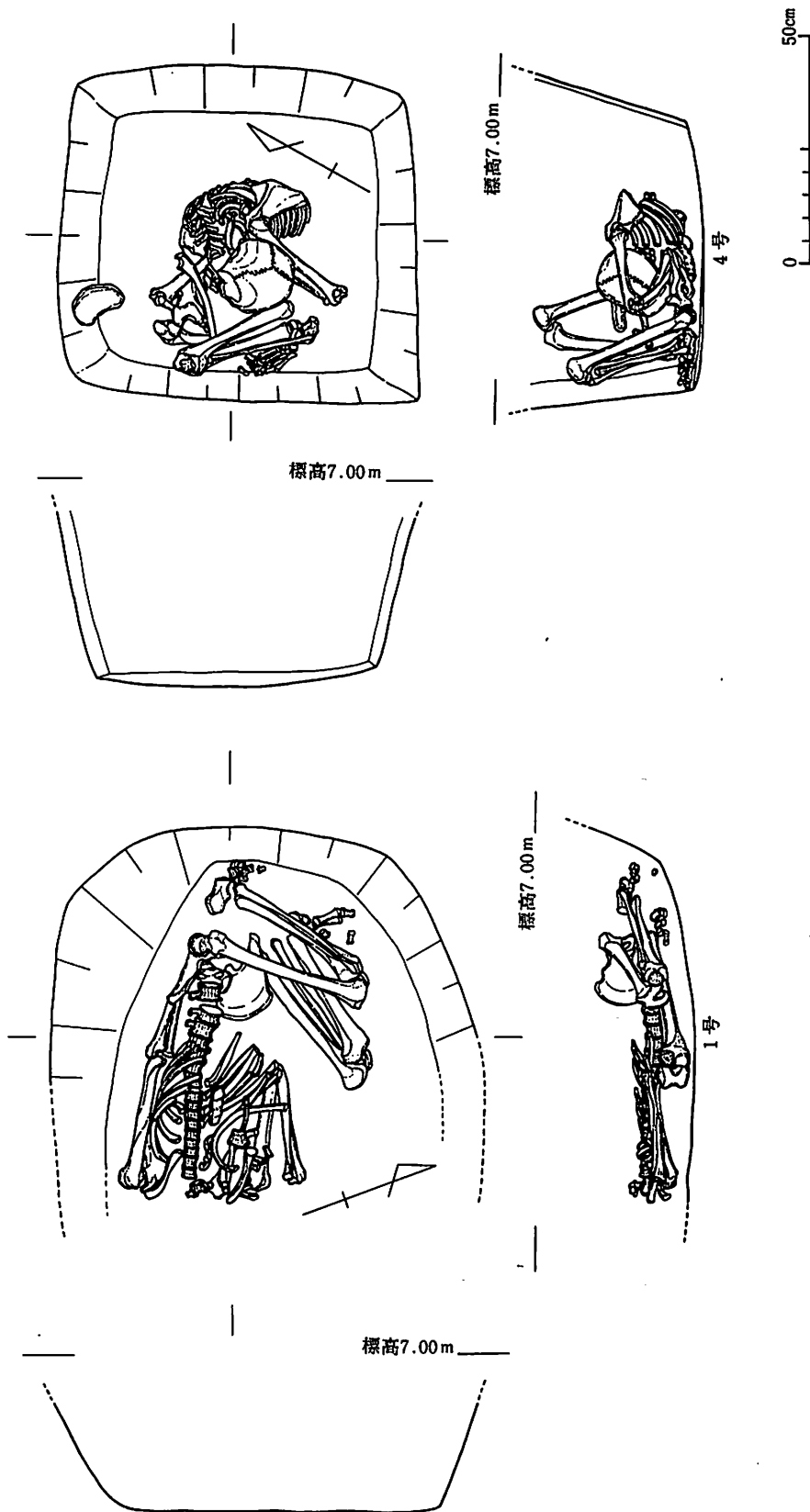
さて、これらを1号～4号土塚墓とし、各々から検出された人骨にも同じ番号を冠することにして、以下個別に記述していきたい。

1号土塚墓； 調査区の東南端近くに位置するが、砂採り工事のため、頭・頸椎と右手の一部が失われている。墓塚は、半分近くを欠くものの、不整な楕円形を成していたと思われる。

人骨は、両脚を強く屈して右に倒し、左前腕を伸ばしたままで右前腕は強く屈するという姿勢で、やや右側臥に傾いた仰臥屈葬である。頭位は南西で、副葬品は見られなかった。

2号土塚墓； 長方形に近いプランをなし、棺金具と思われる銅製品と棺材らしき木質の出土から、今日用いられているような直方体の木棺を使用していたと考えられる。人骨は、仰臥伸展葬で北東に頭位をとり、両腕を右手を上にして組ませて、頭を左に傾けた姿勢をとっている。

この2号土塚墓は、3・4号土塚墓によって切られており、人骨にも乱れが認められる。すなわち、墓塚南端部付近は、墓塚ラインの確認こそ果せなかったものの、3号人骨と近接しており、2号人骨の足根骨以下は大部分が失われ、かつ一部は3号人骨墓塚内に散在していた。さらに、2号人骨左腓骨も原位置を大きく動かされている。それに対して、3号人骨にはこのような位置関係の乱れや骨の欠失は認められず、したがって、2号人骨埋葬後に3号人骨が葬られ、その際に前者の一部が破壊されたこ



第11図 コピロ遺跡1・4号土坑墓実測図



とを知りうるのである。また、同様に、2号人骨は右肋骨も乱されており、4号土塚墓による攪乱であることがうかがえる。

2号人骨の副葬品としては、腰部右側に位置していた貝製品1点があげられるのみである。また、墓壇内からは磁器片2点が出土しているが、小片であり、埋土に含まれていたものとみるべきであろう。さらに、右大腿骨中央部に礫6個が集積しているが、意図的なものかどうかは定かでない。

3号土塚墓； 上記のように、2号土塚墓の南端に接し、一部を切っている。墓壇ラインは、大部分が不明瞭であったが、一部検出した部分と人骨のまとまり具合から、円形に近い平面プランであったと推定される。

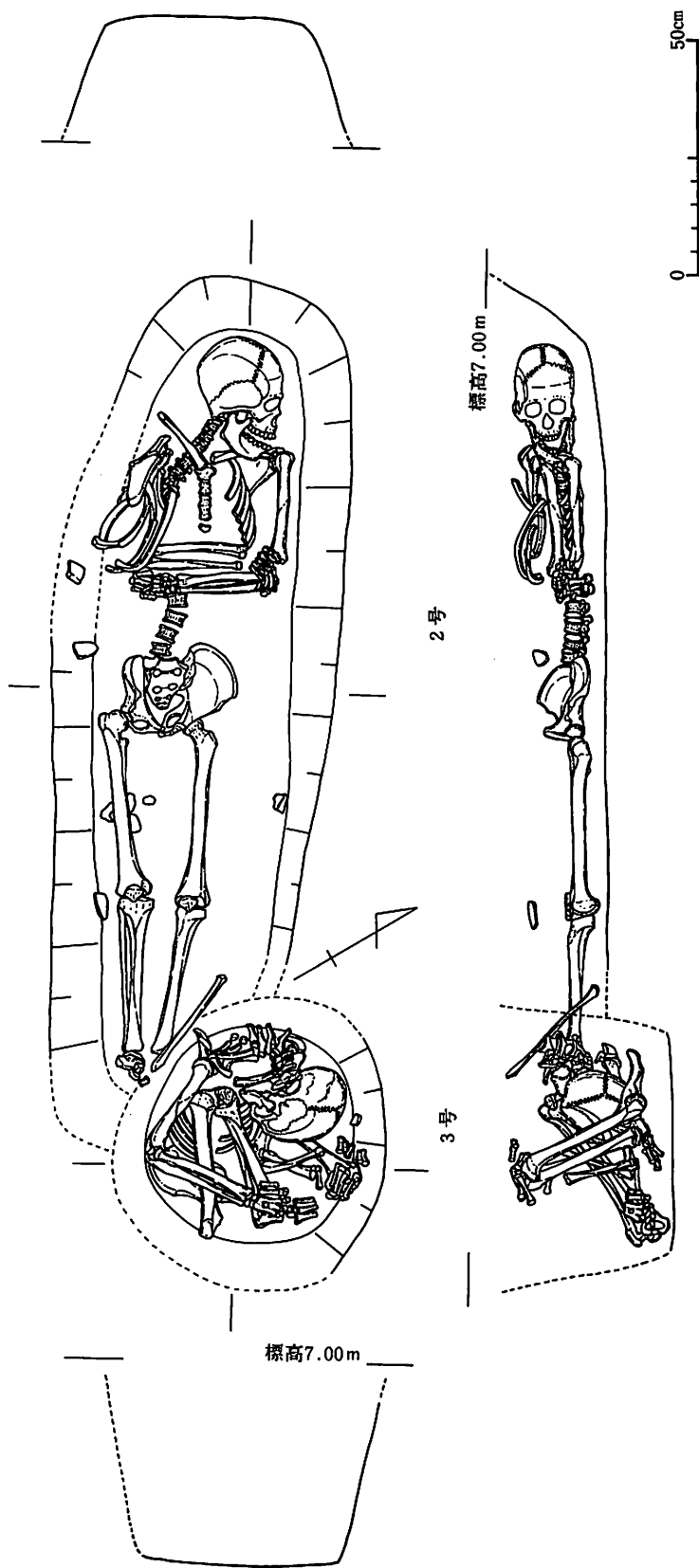
人骨は、膝を立てたその間に頭が倒れ込んだ形の坐葬で、右腕は右膝を抱き、左腕は股間で屈して左膝に手を乗せるという姿勢をとっている。体はほぼ南に面し、人骨のまとまり具合から円柱状、すなわち桶状の棺が想定される。また、副葬品はなく、埋土中に青磁の小片を認めるのみである。

4号土塚墓； 墓壇は方形の平面プランを呈し、3号土塚墓と同様に、2号土塚墓との切り合い関係を有する。人骨は、体を東北に向けた坐葬で、両膝を立て、頭はその間に倒れ込んでいる。左腕は強く屈して下腹部に手を置き、右腕は、右膝上に置いたものと思われるが、前腕が内側へと倒れている。

この4号土塚墓は、方形の平面プランを呈し、その点では箱状の棺を想定することができる。しかし、人骨をみてみると、棺によって確保された空間内において、軟部組織腐朽後ある程度の傾倒・転落を経ながらも、墓壇の方形プランよりはるかに狭い部分にはほぼ円形をなしてまとまっている。したがって、この点を重視するならば、箱状の棺ではなく、3号土塚墓と同様に桶状の棺を用いていたとみるべきであろう。

副葬品はなく、墓壇内にビーチ・ロックが1点みられたが、地上標識とするにはレベルが低く、また位置も片隅に偏っており、意図的なものかどうかは定かでない。

以上、1号～4号土塚墓について述べてきた。これらは、前記のように、いずれもⅢ層堆積終了後に形成されており、1号石棺よりも後出するものである。また、切り合いから、2号→3・4号という時間的關係も把握できた。そして、2・3号土塚墓埋土中から検出された磁器片の年代（近世末）にその上限を求めることができるが、



第12図 コビロ遺跡2・3号土坑墓実測図

この年代観はこれら土塚墓の埋葬型式と矛盾するものではない。 (田中)

(3) 人骨所見 当遺跡の土塚墓よりえられた人骨の所見を要約して表出すると下記の如くである。

土塚番号	性別	年齢	推定身長 (cm)	備 考
1	男	熟年	158.6	40歳代
2	男	成年	156.9	20歳代後半
3	男	成年	159.3	30歳代後半 上・下顎の歯槽萎縮著明、 右手根部に病的骨癒合あり
4	女	若年	146.4	18歳程度

(永井)

(4) ピット・貝溜り 楕円形ピットがⅢ層下面で2箇、Ⅴ層で4箇検出された。大きさは60×80cmから80×100cmで深さ30cm程であった。ピット内には貝殻が多く見られたが、特に北側の2箇のピットは近接しており、ともにピット底部に大形のヤコウガイが1個ずつ検出された。そのうちの1箇には多量の炭がつまっていた。また掘り込みは見られないが貝殻が厚さ数cmにわたり集中する部分が数箇所見られた)

(内山)

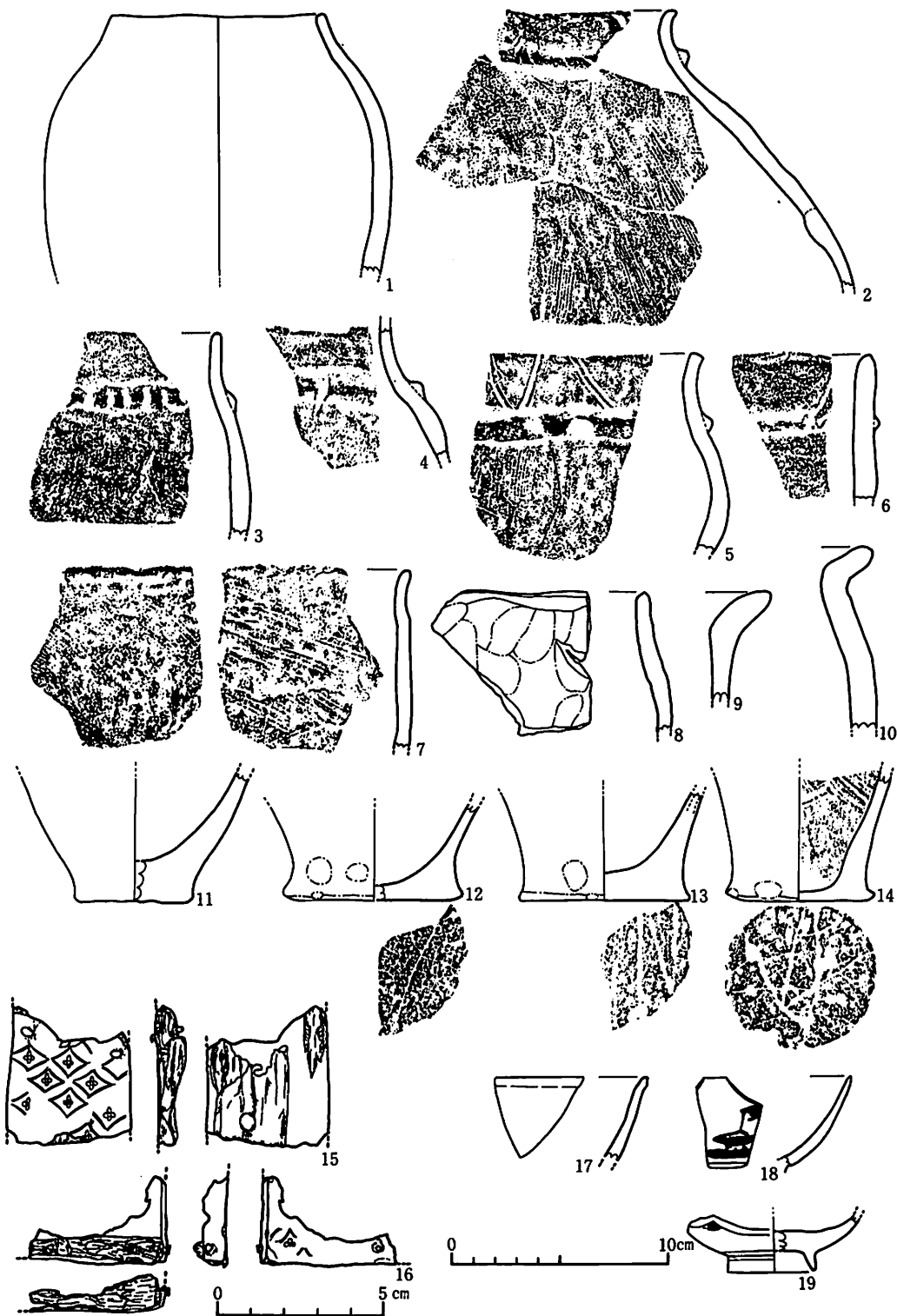
#### 四、出土遺物 (第13図; 図版9下)

##### 1. 土器

出土土器は、少量、細片であったが、その多くは、第Ⅴ層と第Ⅵ層最上部から出土した。但し前述のように第Ⅵ層のものは、第Ⅴ層から沈澱したものと推定されるので、単層出土土器として取り扱うべきである。土器は、その特徴から以下のように大別できる。

I類 頸部に一条の凸帯を施し、凸帯に刻み目をもつ土器である。これは沈線の有無によってI類aとI類bに分けられる。

I類a 沈線を持たないもので、口縁部が外反し、器形は深鉢形が多いが、壺形のものもある。焼成は良好で、色調は黄褐色を呈す。胎土は緻密である。内外器にハケ目が施されているものもみられる。



第13図 コビロ遺跡出土遺物実測図

I層；18・19 III層；17 V層；2・4・5・6・7・9・10・13  
 VI層最上面；1・8・12・14 2号墓抗中；15・16 表採；3・11

I類 b I類の基本型に、さらに口縁部に沈線文を施した土器で、器形は深鉢で、焼成は良好、色調は黄褐色を呈す。口縁は外反するものと垂直に立つものがある。また、凸帯に指による押圧痕をもつものがある。

II類 無文土器をさす。これは口縁部の形状でII類 a とII類 b とに分けられる。

II類 a 口縁が内弯もしくは垂直に立ち、内外器面を荒くナデで調整されており、更にハケ目を施してある。器形は深鉢で、焼成は良好、色調は黒褐色を呈す。胎土は雲母片を含んでいる。

II類 b 口縁部が、強く外に折れ曲がる厚手の土器である。器形は深鉢で、焼成は良好、色調は黒褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。

底部 上述したいずれの類に属するのか不明であるが、平底の底部に大形の葉の圧痕をもつ底部片が出土した。底部は、わずかにはり出しをもつものが多い。

## 2. 陶磁器

I・II・III層から陶磁器が出土したが、出土量は少なく、かつ細片であった。17は青磁で、灰白色の胎土に灰色を帯びたオリーブ色の釉がかかる。18は白色の胎土に、青色の染付がなされている。19は白色の胎土に赤色の染付がなされている。高台内部は露胎のままである。

## 3. 金属製品

2、4号墓抗中より、木棺の飾り金具と思われるものが出土した。銅製で表面には七宝文が連続的に施されている。金具は、銅製の釘で木片に装着されている。(内山)

## 4. 自然遺物

コピロ遺跡で出土した貝類は、下記の通りである。他に魚骨の小破片が少量出土した。

### 腹足綱

ニシキウズ科

アマオブネ科

ソデガイ科

オニコブシ科

イモガイ科

イトマキボラ科

ベニシリダカ

サラサバティ

アマオブネ

クモガイ

コオニコブシ

マグライモ

イトマキボラ

*Tectus conus*

*Tectus maximus*

*Theliostyla albicilla*

*Lambis lambis*

*Vasum turbinellus*

*Virroconus ebraeus*

*Pleuroploca trapezium*

オキシ科 タカラガイ科 斧足綱	シロミオキシ 不明	<i>Bursa bufonia</i>
シャコガイ科 マルスグレガイ科	シラナミ ホソスジイナミガイ スグレモシオガイ ヤエヤマスグレ	<i>Tridacna elongata</i> <i>Gafrarium pectinatum</i> <i>Crassatellites nanus</i> <i>Katelysia hiantina</i>
リュウキュウマスオ科 カゴガイ科	リュウキュウマスオ チヂミカゴガイ	<i>Asaphis dichotoma</i> <i>Fimbria fimbriata</i>

## 五、まとめ

コピロ遺跡に残された人文は、第Ⅲ層最上面の箱形石棺と土塚墓、第Ⅲ層の生活址、第Ⅴ層の兼久式土器の三期に大別できる。

箱形石棺と4基の土塚墓は、いずれも第Ⅱ層と第Ⅲ層の境から掘り込まれているが、前述のように箱形石棺は4基の土塚墓より古い。また、土塚墓も2号→3・4号という先後関係が把握できる。土塚墓はいずれも人骨の遺存度が良好で、仰臥屈葬と仰臥伸展葬各1、座葬2であった。2号土塚墓(伸展葬)からは、木片と棺飾りが発見されており、また3、4号土塚墓は桶状の棺が使用された可能性が高く、木棺が普及していたことが推察できる。これらの土塚墓の時期は、出土した磁器片より近世末頃に比定できる。箱形石棺からは、少量の人骨片が出土したのみで、明確な時期は不明であるが、土塚墓とはそれ程遠くない時期のものと思われる。

第Ⅲ層ではピットが検出され、ピット内には、礫、サンゴ、貝殻が焼けた状態で検出された。何らかの生活址であろうが、時期のわかる遺物がなく、所属年代を明確にできなかった。

第Ⅴ層の兼久式土器の包含層でもピット4箇と貝殻の集中箇所が検出された。ピット内には貝殻、土器片がみられ、うち1箇からは炭が検出された。土器には有文と無文のものがあり、有文のものは兼久式土器である。無文のものは従来の型式にあてはまらないが、出土状況から兼久式にともなうものと思われる。(米倉、内山)

## 辺留窪遺跡

### 一、位置・現状・調査（第14図）

辺留窪遺跡 (Beru-Kubo) は笠利半島東側にあり、太平洋に面し、コピロ遺跡の北西約1.5kmのところの位置している。地籍は大島郡笠利町辺留字辺留窪50番地である。

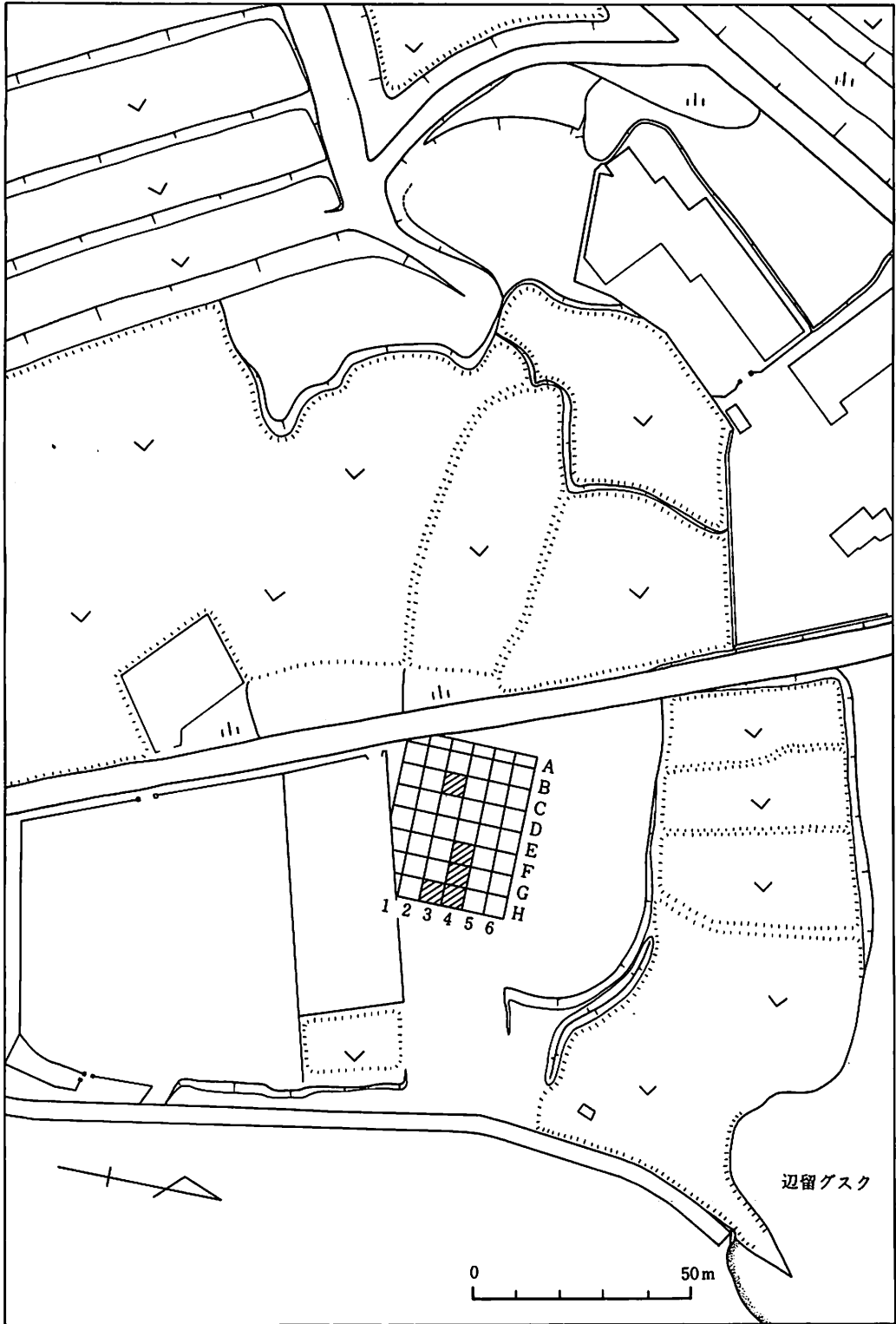
笠利半島東岸は、一般に低い山塊から伸びた台地が緩やかに起伏しながら広がっている。コピロ遺跡から当遺跡付近にかけても同様に、海拔20～30mの台地が大小の彎曲を見せながら南北に続いている。これらの台地は多くが耕地として利用されており、台地の湾入部に形成された低地ごとに小集落が立地している。

辺留窪遺跡の所在する辺留集落もそのひとつであり、砂質土壌で形成された低地に立地している。集落の西側は台地がとり囲み、東は礁原の発達した海に望んでいる。遺跡はその集落北端の海拔6m前後の低地に位置している。この付近一帯は削平を受けて、ほぼ平坦であるが、舌状台地と遺跡に挟まれた遺跡北側の畑地は一段低くなっただけである。古老の言によると旧は湿地帯であつたらしい。このことより付近の旧地形は、かなりな規模の後背湿地を有した海岸砂丘であつたと考えられる。

遺跡の北側で海に向って突出した舌状台地上には、辺留グスク遺跡があり、その北西麓には薩摩藩支配時代の代官屋敷跡が残っている。この台地麓から北に広がる地域は「大笠利」とも呼ばれている。ここは琉球支配時代及び薩摩藩支配時代には、大島統治の中心地だつたとされる歴史上重要な地区である。従つて、この地の南に隣接している辺留一帯も、今後の研究に際し、大笠利を中心とする地理的・歴史的背景の中に含めて考えるのが至当であらう。

この遺跡は、以前中山がグスク時代と思われる土器片、兼久式土器等を表採しており、グスクと関連する遺構の検出が期待されていたもので、この地点に町の施設の建設が予定されるに至つたため、ケジ・コピロ遺跡に平行して調査を行った。

最も表採遺物の多かつた鶏舎の近くに5m方眼のグリッドを組み、南から北へ1・2・3…、西から東へA・B・C…、の名称を付した。まず、特に表採遺物の多かつ



第14図 辺留窟遺跡地形測量図



たF-4グリッドを発掘した。その結果、遺物包含層は攪乱され本来の状況ではなかったものの、南隅に溝状の遺構を確認した。遺構の西端は攪乱されていたが、東側はさらに伸びており、G-4、H-4、H-3のグリッドをさらに発掘し、溝状の遺構が続くことを確認した。また、最後にC-3グリッドを調査したが、遺物包含層や遺構は確認できなかった。(明瀬)

## 二、層序と遺構

〈層序〉(第15図; 図版10下) 層序は第I層から第IV層まで確認された。第I層から第III層までが遺物包含層であるが、全て攪乱を受けている。各々の層の出土遺物の特徴は明瞭ではない。土器・類須恵器・陶磁器片・鉄片・礫・貝類・獣骨・魚骨が各層から混出する状態で、遺物の層位による分離は困難であった。

第I層 表土層である。厚さ5cm前後の灰褐色の固い砂層であるが、赤土を客土した部分もある。

第II層 厚さ15cm前後の黒色を呈した砂層であり、出土遺物量が多く、鉄片も出土している。

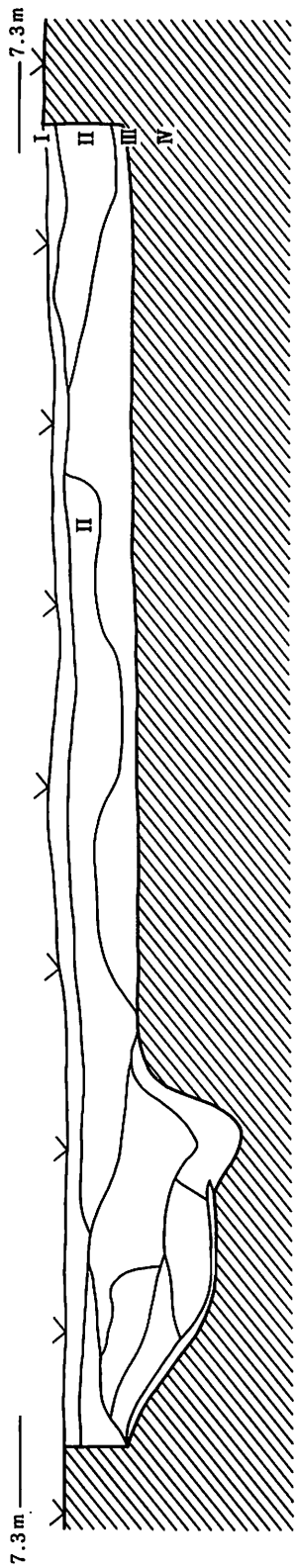
第III層 厚さ5~25cmの明るい褐色層である。第I・第II層に比べて獣・魚骨の出土が目立つ。この層の最上部で溝の立ち上がりが確認された。

第IV層 白色の砂層であり、粒子はやや粗い。無遺物層である。

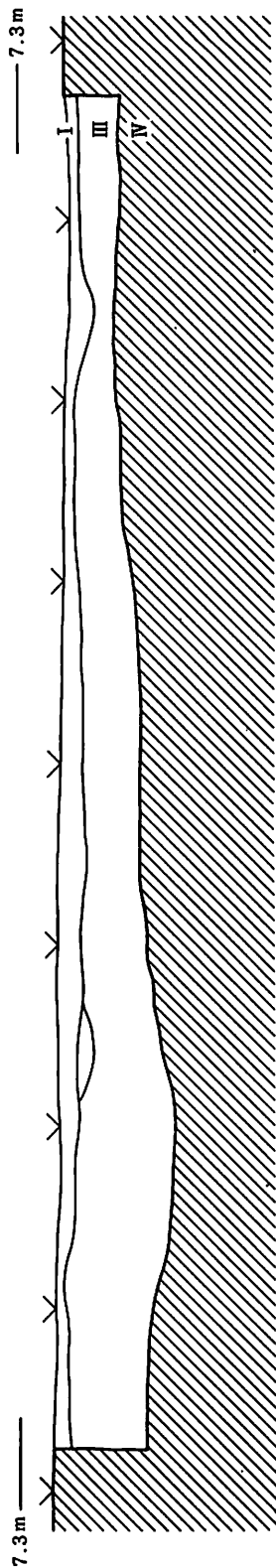
〈遺構〉(第16図; 図版11上) F-4、G-4、H-4グリッドの北端に溝状遺構が検出された。ほぼ東西に走り、西から東に向ってゆるやかに傾斜している。確認できた部分だけで、長さ15m、幅1~2m、深さは最深部で表土より55cmである。覆土の層序は、溝の幅全体にわたって整然と形成されたものではなく、流水の様々な状態に従って複雑に形成されたものである。また、溝状遺構のほぼ中央には、黒色砂層と褐色砂層が各々数cmの厚さで互層を成している部分が見られる。溝状遺構からの出土遺物は、それ以外の部分と大差はないが、とりわけ木炭粒の出土が多く、溝状遺構周辺には直径1cm~8cmの軽石が多数集中している。(谷本)

## 三、出土遺物

(1) 土器 (第17図; 図版11下)



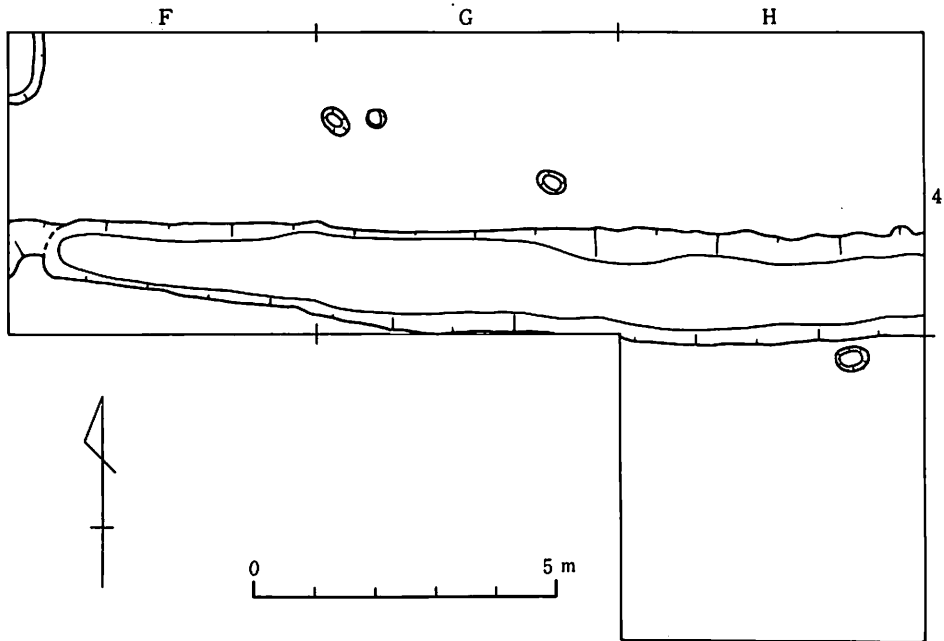
西壁



南壁



第15图 边窟遗迹土层断面图



第16図 辺留窪遺跡遺構配置図

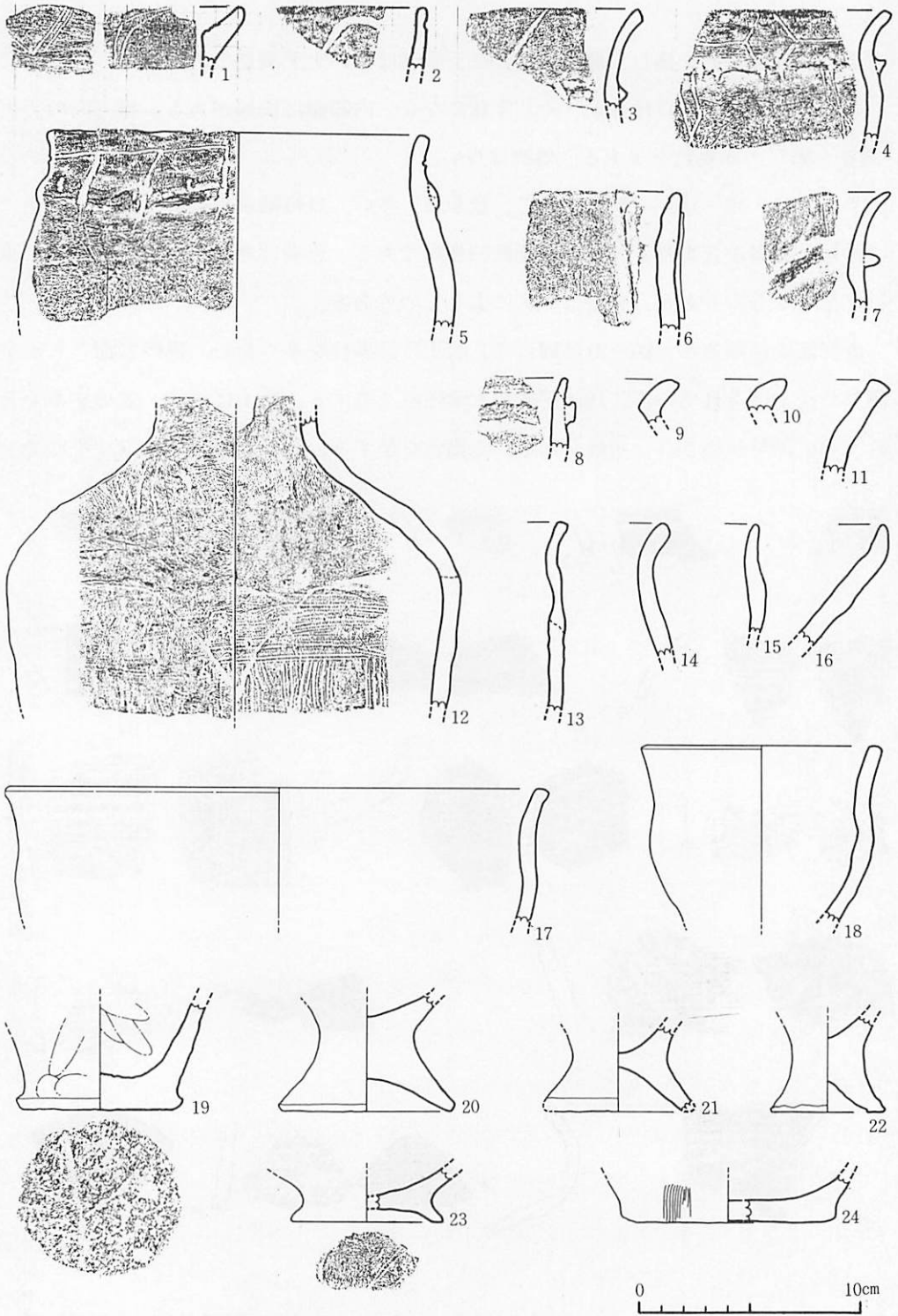
表面採集品と出土した土器片を合わせて約450点あるが、全体の器形を復元できるものはない。これらは器形・文様の相違から6類に分類できる。

I類(1) 口縁部が外反し、内器面に稜線のある土器で、1の1点のみである。口縁部の内外両面に浅い沈線が施されている。胎土には白砂が含まれており、焼成は比較的良好である。両面とも横方向のナデ調整であり、にぶい橙色を呈する。

II類(2~5) 頸部に断面三角形の凸帯を貼り付けて刻み目を施し、更に凸帯の上下に沈線を施している。口縁部がやや外反する深鉢形土器である。胎土には砂粒・雲母を含み、ナデ調整が施されている。焼成は比較的良好で、赤褐色ないしはにぶい橙色を呈している。この中で5は凸帯断面の三角形がくずれ、蒲鉾状になり、また凸帯の幅が他に比べて広い。外器面は黒褐色を呈している。

III類(6~8) 貼り付け凸帯を弧状や縦に施し、ナデ調整により仕上げられている。胎土には砂粒・雲母が含まれる。焼成は比較的良好く、赤褐色を呈する。

IV類(12) 壺形土器の胴部片である。胎土に砂粒・雲母を含む。焼成は良好で、明赤褐色を呈する。外器面は条痕を施した後、部分的にナデ調整がなされている。内



第17図 辺留窪遺跡出土土器実測図

I層：3・11・14・21・22・24 II層：7・20 溝状遺構内：6・20

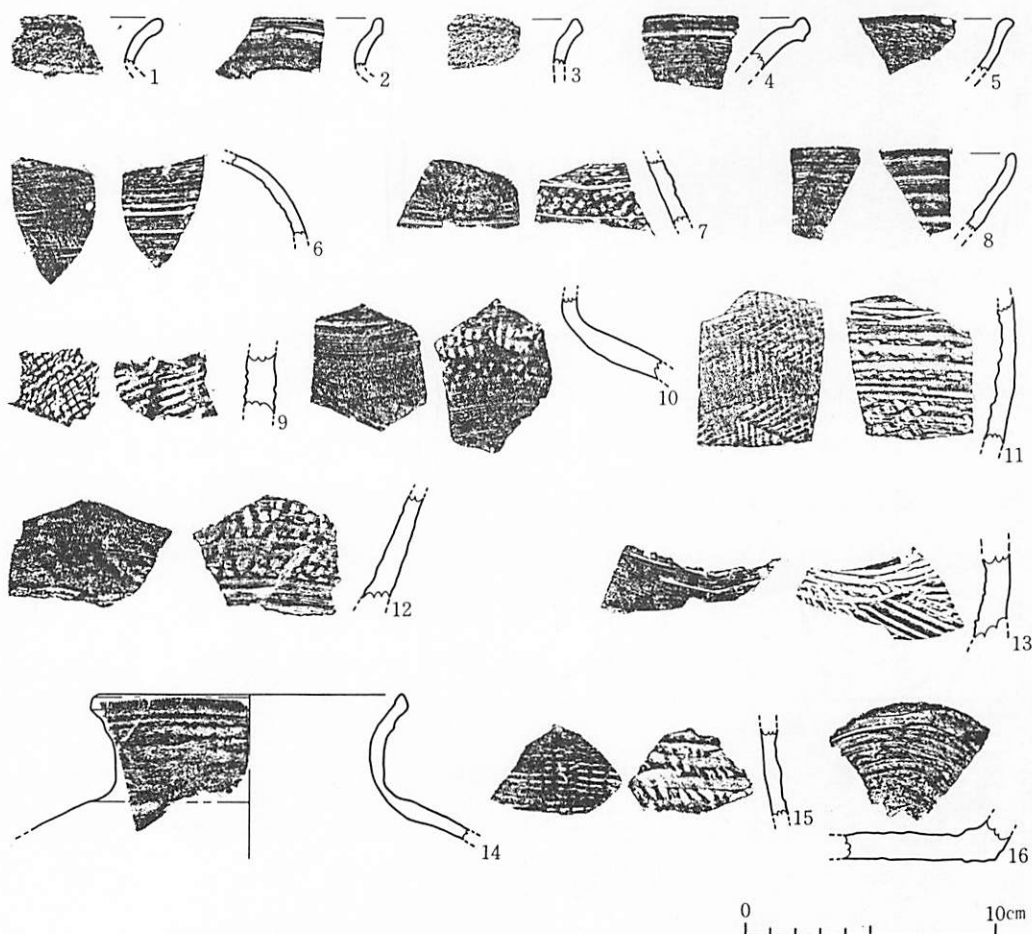
表採：1・2・4・5・9・12・13・15～19・23

器面の胴部は条痕を施し、肩部の接合部、頸部は粗いナデ調整である。

V類(9・10) 口縁部が「く」字状になり、内器面に稜線がある。横方向のナデ調整を施し、赤褐色を呈する。焼成は良い。

VI類(11・13~18) 無文土器で、量が最も多い。口縁部がやや外反する。胎土には砂粒・雲母が含まれる。焼成は比較的良好である。色調は赤褐色が主であるが、黒色を呈するものもある。調整はナデによるものである。

底部は4種類ある。20~21は脚台で、胎土には砂粒を多く含む。内外器面ともナデ調整で仕上げられている。19は平底で木葉圧痕を有する。胎土に砂粒・雲母を多く含む、ナデ調整が施され、指痕がある。赤褐色を呈する。II類に属する。24は平底で、



第18図 辺留窪遺跡出土土器実測図

I層；6・14 III層；1・3・7・8 溝内；2・5・15・16 表採；4・9・10・12

胎土に砂粒・雲母を含む。焼成は比較的良好で、赤褐色を呈する。外器面のみ縦方向のハケ目があり、他はナデ調整である。23は脚台で、薄手である。焼成は良好で、外器面は浅黄色、内器面は黒色を呈する。磨滅が激しいため、調整法は不明であるが、外底部にヘラ記号らしきものがある。

I類は弥生時代後期相当、II類は兼久式、III類はフェンサ下層式相当、IV・V・VI類の形式名は不明である。23はいわゆる内黒土器と呼ばれる土師器に類似している。

(松原)

## (2) 炆器 (第18図; 図版12上)

いわゆる類須恵器であり黒褐色層を中心として20点余りが出土した。14は平底の壺形で口縁部は強く外反する。16は底部内面にロクロ痕が見られる。6・8・10・12は内器面に叩き締め後に施されたロクロによる調整痕が明瞭に見られる。色調は器面が青灰色で断口が黒灰色のものが1・3・5、断口が暗赤褐色のものが6・7・10・11・16。13は外器面が灰褐色で内器面は明赤褐色を呈する。

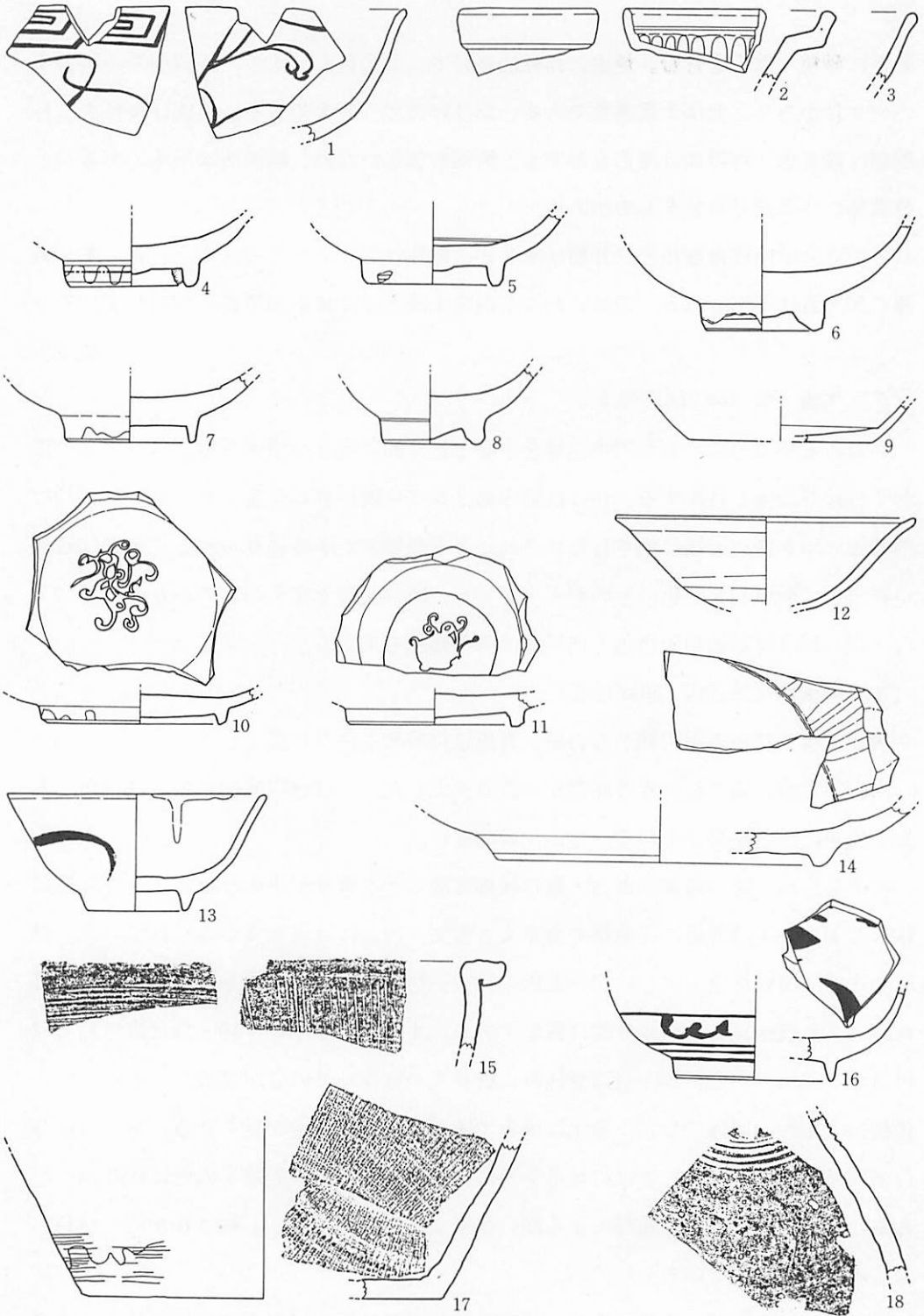
## (3) 陶磁器 (第19図; 図版12下)

溝状遺構及びその周辺部から白磁、青磁染付等40点余りが出土した。

中国製白磁 碗口縁部片と底部片が数点出土した。9は白磁底部で胎土は白色であるが僅かに灰色を帯びている。釉は比較的薄い。

中国製白磁 碗口縁部・高台・盤口縁部底部等30点余りが出土した。1・3は碗口縁部である。1の外面には篋描で唐草文と雷文、内面には唐草文が描かれている。釉は半透明で薄い緑色を呈しにふい光沢を持つ。胎土は灰色で砂粒を含む。12は体部外面にロクロ痕が見られ口縁先端は露胎である。4・5・6・8・10・11は高台片で畳付は全て露胎である。10・11は見込みに唐草文が描かれているが型押しによるものか篋描によるかは明確でない。胎土は灰色で所々に細かな気泡が見られる。2・14は盤口縁部及び底部である。2は口縁部を外に折り曲げ更にその先端を内側に折り返してある。両者とも内器面に篋描による細い蓮華文が描かれている。釉は16が淡い緑色、21は濃緑色を呈している。

染付 16は小形の碗底部である。濃青色の呉須で外器面に4本の圈線を描き、内器面には草文が描かれている。両者とも素地は灰色を帯びた白色を呈し、釉は青白色で



第19图 边留窪遺跡出土陶磁器実測图

I層；2・6・7・9~11・13・16・18  
 III層；3・4・8・12・14・15・17 溝内；1・5・16

0 10cm

ある。13の底部内面は重ね焼きのため露胎である。

その他 18は胎が固く焼きしめられ断口及び外器面は赤褐色で内器面は灰色を呈し無釉である。頸部には5本の沈線が入り内器面にはロクロ痕が顕著である。15・17は摺鉢の口縁部及び底部である。内外器面とも滑沢のある濃い暗赤褐色の釉が薄く施されている。胎土は赤褐色を呈し砂粒を多く含む。(茂山)

#### 4. 自然遺物

貝は発掘区全般にわたって分布している。表面採集及び出土した貝は14科26種ある。

腹足綱		
ニシキウズ科	ベニシリダカ	<i>Tectus conus</i>
	サラサバティ	<i>Tectus maximus</i>
リュウテン科	チョウセンサザエ	<i>Marmarostoma agryrostoma</i>
	ヤコウガイ	<i>Lunatia marmorata</i>
アマオブネ科	リュウキュウアマガイ	<i>Amphinerita insculpta</i>
オニノツノガイ科	オニノツノガイ	<i>Cerithium nodulosum</i>
ソデガイ科	マガキガイ	<i>Conomurex luhuanus</i>
	スイジガイ	<i>Harpago chiragra</i>
	クモガイ	<i>Lambis lamdis</i>
タカラガイ科	ヤクジマダカラガイ	<i>Peribolus arabica</i>
	ヒメヤクジマダカラガイ	<i>Peribolus depressa</i>
アツキガイ科	シラクモガイ	<i>Purpura armigera</i>
	ツノテツレイシ	<i>Purpura hippocaastanum</i>
	センジュモドキ	<i>Chicoreus torrefactus</i>
オニコブシ科	コオニコブシ	<i>Vasum ceramicus</i>
イモガイ科	マダライモガイ	<i>Virroconus ebraeus</i>
	ヤナギシボリイモ	<i>Phizoconus miles</i>
	クロフモドキ	<i>Lithoconus leopardus</i>
カラマツガイ科	コウダカカラマツ	<i>Siphonaria laciniosa</i>
斧足綱		
ナミノコガイ科	リュウキュウナミノコ	<i>Latona fava</i>
マルスダレガイ科	ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>
	アラヌノメ	<i>Periglypta reticulata</i>
	アサリ	<i>Tapes phillippinarum</i>
	ホソスジイナミガイ	<i>Gafrarium tumidum</i>
ヌノメアカガイ科	ヌノメアカガイ	<i>Cucullaea labiata granulosa</i>
シャコガイ科	ヒメジャコ	<i>Tridacna crocea</i>



#### 四、ま と め

辺留窪遺跡周辺の地形は、長年の居住による攪乱、近年の圃場整備による削平等により、辺留グスクを除いて、旧地形を留めないほどの変貌をとげている。そのため発掘調査の結果確認された基本層序のうち本来の状況を保った遺物包含層は既に存在せず、時期の異なる遺物が混在して出土する状況であった。F-4、G-4、H-4グリッドで確認された流水を伴う溝も、包含する遺物の上限が弥生時代後期であることが判明しただけで、明確な時期を突きとめることができなかった。

出土した遺物は弥生時代後期・兼久式土器の時期、グスク時代初期～薩摩藩支配時代初期の三期に大別できるものの、無文土器の多くは明確な時期がわからないままである。三期のうち最も多いものは、グスク時代初期～薩摩藩支配時代のものであり、フェンサ下層式相当の土器、類須恵器、陶磁器の大部分がこれに属する。時期不明の無文土器の多くもこの時期のものではないかと思われるが、確証がない。陶磁器は明代の青磁、白磁、赤絵、染付、俗に南蛮陶器とも呼ばれている荒焼、薩摩焼の小破片がほとんどで、16～17世紀にかけてのものである。これ以後のもので、しかも他の遺跡から盛んに出土する古伊万里・古唐津の類がほとんど出土していないことは、薩摩藩の代官所が大笠利から移転していった時期と符合している。 (米倉)